

宗 像

# 埋蔵文化財発掘調査概報

— 1983年度 —

宗像市文化財調査報告書 第7集

1984

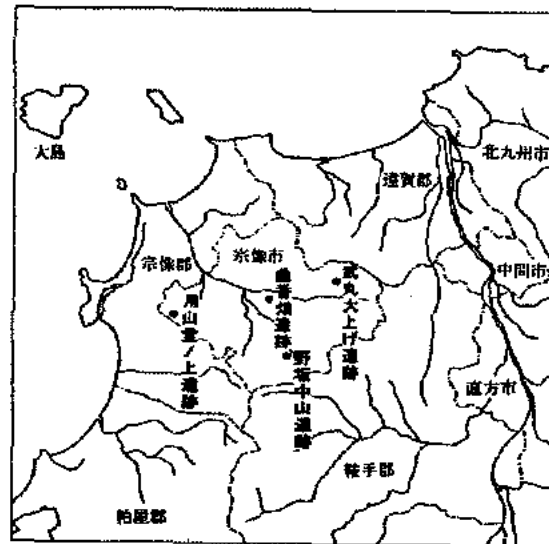
宗 像 市 教 育 委 員 会

宗 像

# 埋蔵文化財発掘調査概報

— 1983年度 —

宗像市文化財調査報告書 第7集



1984

宗像市教育委員会

## 序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置しており、両大都市の通勤圏内にあって十数年来、宅地造成が著々と進められてきました。取り分け、ここ数年は宅地開発とそれに伴う人口増加により、公共施設の建設が急務となっています。これらの開発に並行して、文化財は、その所在を新たにすると共に、またたく間に消滅への道を歩んでいます。

開発と文化財保護の対立する問題は、宗像市にとって真剣に取り組むべき課題であると考えております。

本書は1983年度中の公共事業、個人造成等に伴う緊急発掘調査についての概要を示したものです。引き続き本報告のための整理を行っていく考えであります。この報告が、宗像市における文化財保護に生かせるよう努力を重ねてゆく所存です。

最後に、本書に示された、発掘調査及び整理にあたりまして、県教育委員会文化課の助言、御指導を迎えました。また、発掘整理に参加された方々、及び、土地所有者の方々の応援、協力に対しまして心から御礼申し上げます。

1984 年 3 月 31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

## 例 言

1. 本書は、1983年度に国、県の補助を受けて実施した宗像市内の文化財発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となり、福岡県教育委員会文化課と九州歴史資料館の指導、助言、応援を得た。
3. 朝町妙見遺跡の人骨の実測、取り上げには九州大学医学部の田中良之助手にお願いした。
4. 本書使用の図の作製、製図は宮小路賀宏、原俊一、飛野博文、安部裕久、板橋晴世、清家直子、徳永映子が行った。
5. 本書使用の写真は、宮小路、原、飛野が撮った。
6. 本書の執筆は、Ⅲ-2・4を飛野、Ⅲ-5-(3)を安部、その他を原が担当した。
7. 本書の編集は原、飛野、安部が行った。
8. 本書に取りあげた遺跡の出土遺物の注記はつぎのとおり記号化した。

野坂中山遺跡…NS中山 曲香烟遺跡…M香烟  
 用山堂ノ上遺跡…MY堂ノ上 朝町妙見遺跡…AS妙見  
 武丸大上げ遺跡…TM大上げ 溝…D 堅穴・柱穴…P 包含層…H

## 本 文 目 次

	本文頁
第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過	2
第Ⅲ章 発掘調査の概要	4
1. 野坂中山遺跡	4
2. 曲香烟遺跡	11
3. 用山堂ノ上遺跡	22
4. 朝町妙見遺跡	23
5. 武丸大上げ遺跡	48
第Ⅳ章 おわりに	54

## 図 版 目 次

図版 1	野坂中山遺跡	1. 空中写真 (北から)	2. 第 1 号溝 (北から)
図版 2	野坂中山遺跡出土遺物		
図版 3	曲香烟遺跡	1. A地区竪穴群	2. B地区竪穴群
図版 4	曲香烟遺跡出土遺物		
図版 5	用山堂ノ上遺跡	1. 調査区全景 3. 第 1 号竪穴	2. 小竪穴
図版 6	朝町妙見遺跡	1. 調査前全景 (北から)	2. 調査後全景 (北から)
図版 7	朝町妙見遺跡	1. 第 1 号墳第 1・第 2 主体部	2. 第 1 号墳第 1・第 2 主体部調査後
図版 8	朝町妙見遺跡第 1 号墳出土遺物		
図版 9	朝町妙見遺跡	1. 第 2 号墳主体部	2. 第 2 号墳主体部 (天井石除去後)
図版 10	朝町妙見遺跡第 2 号墳出土遺物		
図版 11	朝町妙見遺跡	1. 第 3 号墳主体部	2. 第 3 号墳主体部閉塞状況
図版 12	朝町妙見遺跡第 3 号墳出土遺物 I		
図版 13	朝町妙見遺跡第 3 号墳出土遺物 II		
図版 14	朝町妙見遺跡	1. 第 4 号墳主体部	2. 第 4 号墳玄室遺物出土状況
図版 15	朝町妙見遺跡第 4 号墳出土遺物 I		
図版 16	朝町妙見遺跡第 4 号墳出土遺物 II		
図版 17	武丸大上り遺跡	1. 遺跡全景 (南から)	2. 調査区全景
図版 18	武丸大上り遺跡出土遺物		

## 付 表 目 次

第 1 表	1983年度発掘調査一覧表	本文頁 2
第 2 表	曲香烟遺跡弥生時代竪穴法量表	11

# 挿 図 目 次

	本文頁
第1図 1983年度発掘調査位置図	3
第2図 野坂中山遺跡遺構配置図	折り込み
第3図 野坂中山遺跡出土遺物実測図Ⅰ	7
第4図 野坂中山遺跡出土遺物実測図Ⅱ	8
第5図 野坂中山遺跡出土遺物実測図Ⅲ	9
第6図 曲香遺跡地形測量図	12
第7図 曲香遺跡遺構配置図	折り込み
第8図 曲香遺跡竪穴実測図	15
第9図 曲香遺跡出土遺物実測図Ⅰ	17
第10図 曲香遺跡出土遺物実測図Ⅱ	18
第11図 曲香遺跡出土遺物実測図Ⅲ	19
第12図 用山堂ノ上遺跡遺構配置図	22
第13図 用山堂ノ上遺跡第1号竪穴実測図	22
第14図 朝町妙見遺跡地形図	23
第15図 朝町妙見遺跡地形測量図	24
第16図 朝町妙見遺跡地山整形図	25
第17図 朝町妙見遺跡第1号墳第1主体部実測図	27
第18図 朝町妙見遺跡第1号墳第2主体部実測図	28
第19図 朝町妙見遺跡第1号墳出土遺物実測図Ⅰ	29
第20図 朝町妙見遺跡第1号墳出土遺物実測図Ⅱ	30
第21図 朝町妙見遺跡第2号墳主体部実測図	31
第22図 朝町妙見遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅰ	32
第23図 朝町妙見遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅱ	33
第24図 朝町妙見遺跡第3号墳主体部実測図	34
第25図 朝町妙見遺跡第3号墳主体部閉塞図	35
第26図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅰ	36
第27図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅱ	37
第28図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物Ⅲ	38
第29図 朝町妙見遺跡第4号墳主体部実測図	39
第30図 朝町妙見遺跡第4号墳主体部閉塞図	40
第31図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅰ	41
第32図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅱ	41
第33図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅲ	42
第34図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅳ	43
第35図 朝町妙見遺跡第3・4号墳出土遺物実測図	44
第36図 武九大上ノ遺跡遺構配置図	49
第37図 武九大上ノ遺跡出土遺物実測図Ⅰ	51
第38図 武九大上ノ遺跡出土遺物実測図Ⅱ	53

## 第1章 はじめに

宗像市は、福岡市・北九州市のベッドタウンとしての性格を強めていますが、都市化の傾向と併行して、旧来の農業基盤を整備し、新たに近郊型の農業経営を目指しています。2件の県営圃場整備をはじめ、市営、団体営の圃場整備があり、また個人規模での農業基盤整備も年々進められています。この種の事業には、おのずと文化財の所在地が重なっており、事業計画の段階で、削平を受ける事が必至であるため、保存が可能な区域以外について、緊急発掘調査を実施することになった。

本書は、1983年度の発掘調査について、概要報告したものである。事業は次の組織で行った。

総 括	宗像市教育委員会	教育長	竹原 瑛
		教育部長	白木 国明
庶務・会計		社会教育課長	野中 秀秋
		社会教育係長	竹村 功
		社会教育主事	立石 実
			城月かよ子
発掘調査	福岡県教育委員会	文化課調査係長	宮小路賀宏
	宗像市教育委員会	社会教育課主事	原 俊一
発掘調査指導	九州歴史資料館	嘱託	飛野 博文
		嘱託	安部 裕久
		調査課長	石松 好雄
		主任技師	高橋 章

調査の過程において、福岡農林事務所、宗像市建設産業部農地整備課、宗像市南郷土地改良区、宗像市吉武土地改良区、竹中土木、大神組、宮崎組、今村組の方々に御協力戴き、また、土地所有者の吉田竜馬氏、舟津博海氏、高橋重富氏の御好意に感謝の意を表したい。

最後に、発掘調査には地元はじめ、福岡教育大、福岡大、別府大学生の参加協力を戴いた。

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

1983年度の発掘調査は、梅雨明け後に県営圃場整備の着手される9月に始まった。

野坂中山遺跡は、南郷地区県営圃場整備事業に伴い緊急発掘調査を行った遺跡である。前年度迄に朝町工区が終了し、今年度から野坂工区に事業が移った。前年度の試掘により、遺跡の範囲を確認しており、発掘調査は、削平により消滅する部分の約900㎡について実施した。

曲香烟遺跡は、1972・1973年度の分布調査により周知された遺跡である。1983年度に地権者により農圃整備事業が計画され、遺跡地の保存について協議を重ねたが、当該地が事業区の最高所に位置し、事業の中心地区となるために、削平部分について緊急発掘調査を実施した。発掘調査面積約2100㎡である。

用山堂ノ上遺跡は、市営の地区再編農業構造改良事業に伴い緊急発掘調査を行った遺跡である。遺跡地は畑地造成等によりかなりの削平を受けており、事業にあたっては、切り盛り調整もあり、削土部分の発掘調査を実施したが、ほとんど、遺構を確認するに至らず、短期日の調査となった。発掘調査面積約100㎡。

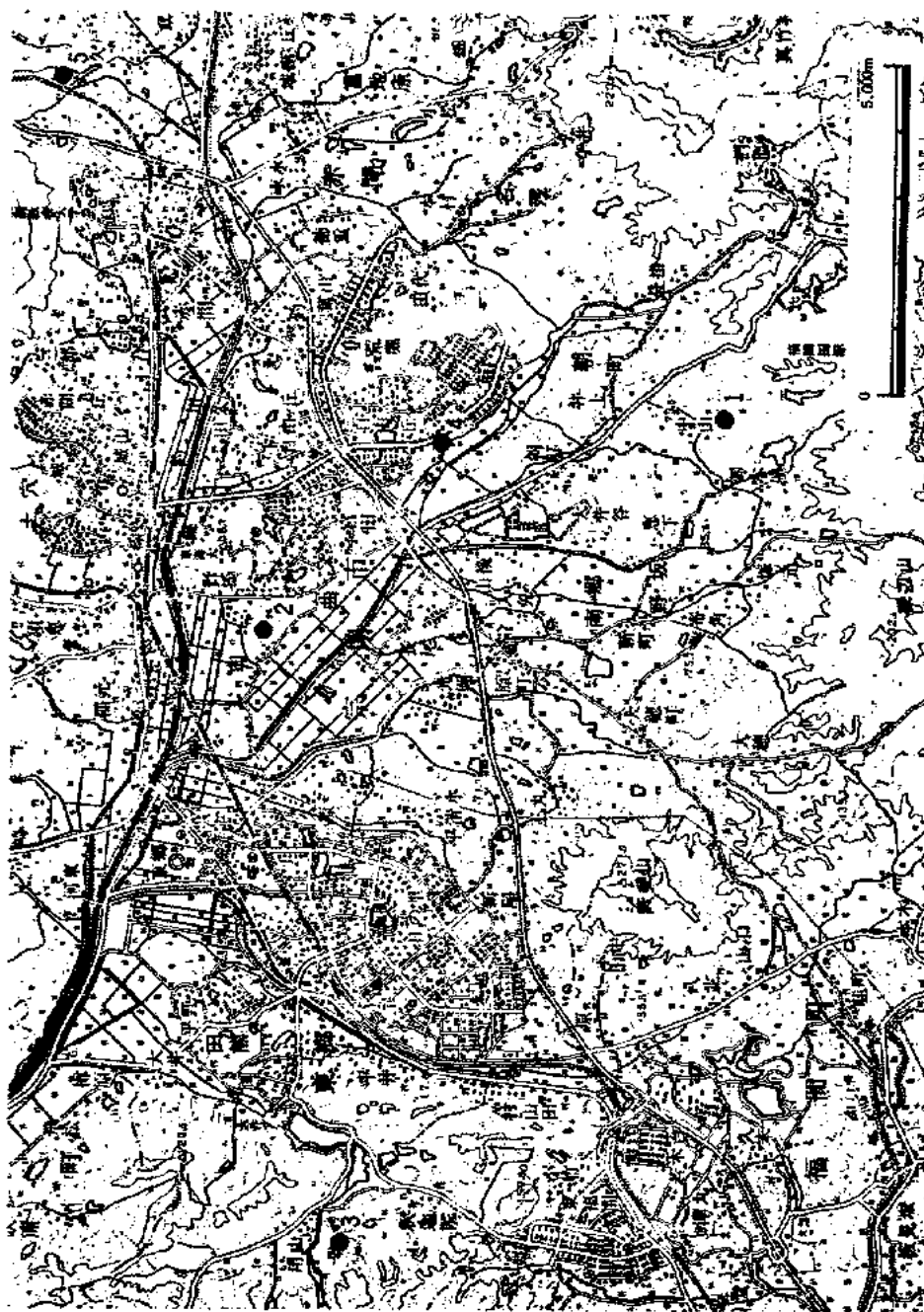
朝町妙見遺跡は、1972・1973年度の分布調査により周知された遺跡であったが、遺跡地の掘に所在する民家側の斜面が地崩れを起こしており、災害防止のために、当該地の削平工事の必要があり、急拠、当該遺跡の緊急発掘調査を実施するに至った。発掘調査約600㎡。

武丸大上げ遺跡は、個人規模の水田基盤整備に伴い、緊急発掘調査を行った遺跡である。前年度実施した試掘調査から遺跡の所在を確認していた。1983年当初になって、当該地が県営圃場整備から個人造成へ変わったが、地権者の好意により、発掘調査の終了迄工事着工を待って戴き、当初の計画通り、削平部分についての緊急発掘調査を実施した。発掘調査面積約1200㎡。

第1表 1983年度発掘調査一覧表

遺 跡 名	所在地(宗像市)	調査原因	調査面積	調 査 期 間
野坂中山遺跡	大字野坂字中山	県営圃場整備	約900㎡	1983年9月2日～10月2日
曲香烟遺跡	大字曲字香烟池	農圃造成	約2100㎡	1983年9月5日～10月11日
用山堂ノ上遺跡	大字用山字堂ノ上	市営圃場整備	約100㎡	1983年10月4日～10月6日
朝町妙見遺跡	大字朝町字妙見	災害防止	約600㎡	1983年10月5日～11月29日
武丸大上げ遺跡	大字武丸字大上げ	個人圃場整備	約1200㎡	1983年10月18日～11月30日





第1図 1983年度発掘調査位置図 (1/50,000)

1. 野坂中山遺跡 2. 曲香加遺跡 3. 用山臺/上遺跡 4. 朝町砂見遺跡 5. 武九大上遺跡

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 1. 野坂中山遺跡<sup>の さかなかやま</sup>

#### (1) 概 要

遺跡は宗像市と若宮町との境から、北へ派生する丘陵の東側緩斜面に位置し、検出遺構面の標高は42～43mである。遺跡の前面の水田をはさんだ東方 100mの斜面には、当遺跡と同時期と考えられる積石塚が10数基存在している。

遺構は幅約20m、長さ約45mの間に分布しているが、長さは南と北へさらに延びている。

遺跡背面の丘陵は裾部から急傾斜しており、遺跡の形成期に、削土整形された可能性がある。土層は第1層に耕作土、第2層に褐色土包含層が丘陵裾部から東へ向かって徐々に厚く堆積しており、部分的には1m近くの堆積があった。大半の出土遺物はこの層からの出土である。検出遺構は溝13本と多数の柱穴・竪穴である。このうちの第1号溝は、遺跡の東側を限るものと考えられる。

#### (2) 遺 構 (第2図)

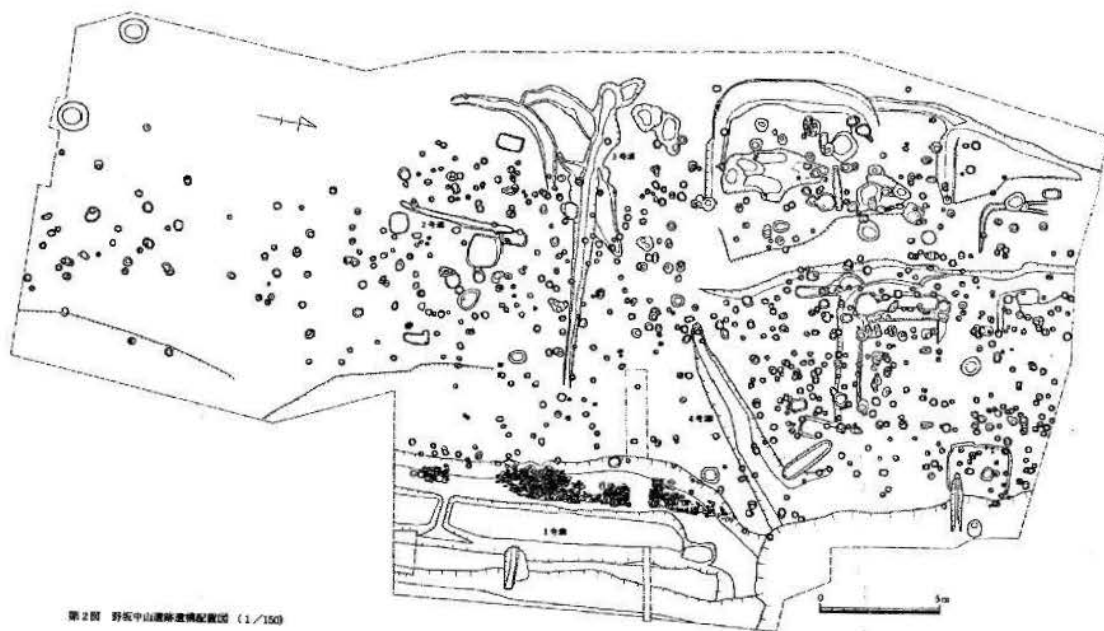
検出した遺構のうち、第1号溝は遺跡の東側を限るものと考えられる。確認した溝の長さは約15mとわずかではあるが、丘陵裾部と平行して南北に走っており、遺跡の南側において西側から東へ曲折する谷地からの用水路としての役目をもつものと推定できる。溝幅は約4mで西側では段をもち、この段上面に溝と並行して石組みがみられる。溝の東側では1ヶ所に排水のための小溝が切られている。溝の最北部は標高が高くなって溝をとじている。出土遺物がなく溝の形成時期について確定できない。

他の溝は住居区界ないし排水のためと考えられるものが3本、住居に伴う排水溝と考えられるものが9本検出できた。

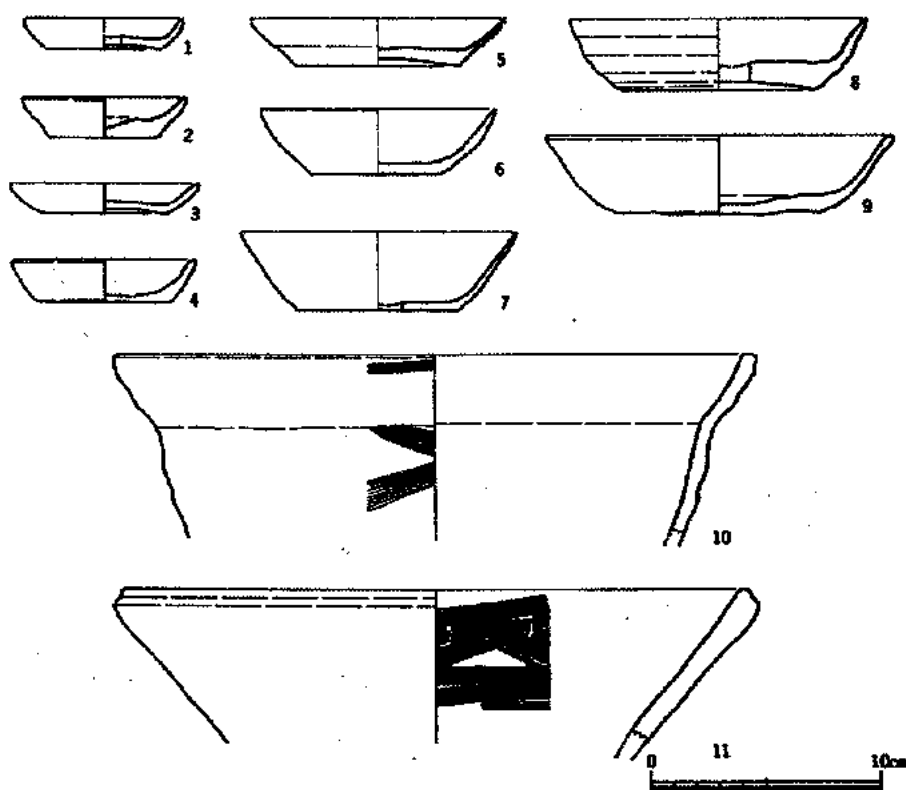
住居はすべて掘立柱建物である。数百の柱穴跡から建物群の構成を検出するには至っておらず、今後の十分な検討を要している。

#### (3) 遺 物 (第3・4・5図)

出土遺物は整理箱約20箱ほどになるが、ほとんどのものが包含層中の出土であり、遺構出土はわずかである。遺物は土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・および石製品である。遺物整理が中途の段階であり、全容を明らかにできないが1部図示して遺物の概略としたい。



第2図 野矢中山遺跡平面配置図 (1/150)



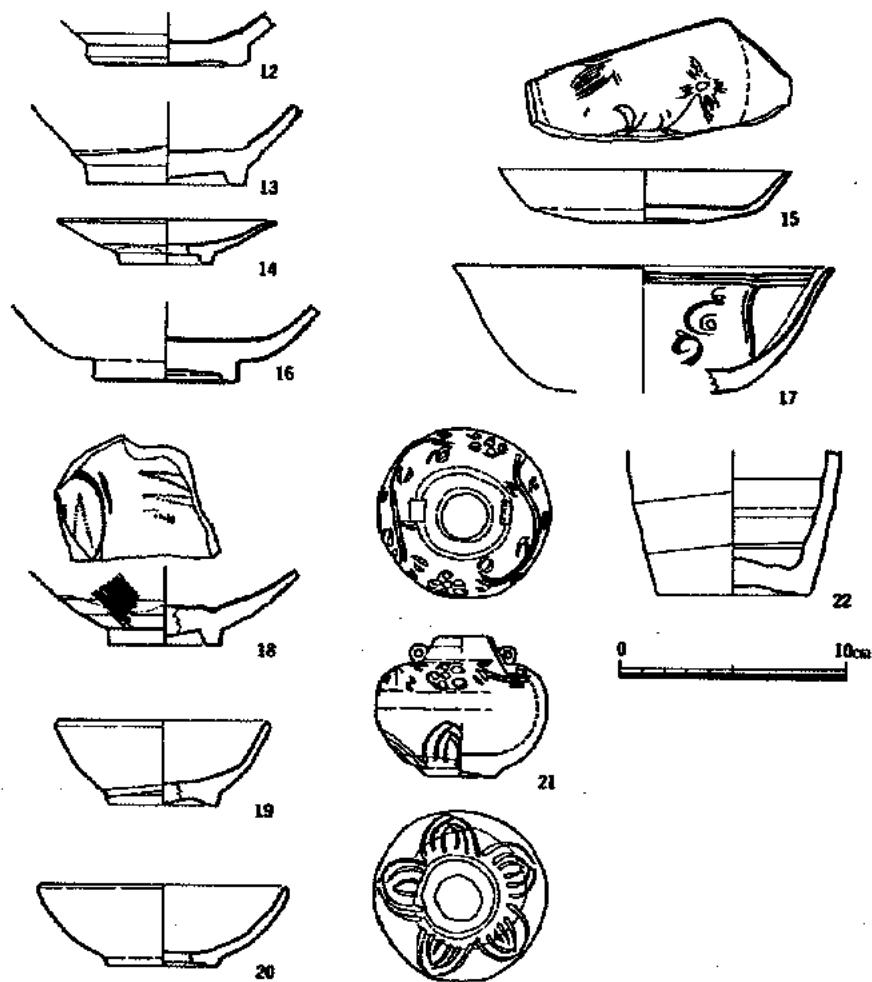
第3図 野坂中山遺跡出土遺物実測図Ⅰ(1/3)

土師器(第3図1~3、5~10) 1~3は土師器皿で、小皿に相当する。口径7.0~8.2cm、器高1.3~1.9cmでいずれも糸切り底である。5~8も土師器杯で口径10.2~13.0cm、器高2.1~3.5cm、いずれも糸切り底である。9は大型杯である。口径15.2cm、器高3.9cm。他の土師器に比べ、胎土はきめ細かい。糸切り底である。図示した以外には高台付小皿等が出土している。10は土師器の土鍋と思われる。口縁直下は小さく屈曲し、口縁部は内彎している。口端部は平坦からやや丸みをもっている。内面には横方向の刷毛目調整を施している。外面には、煤を付着している。口径16.2cm。

瓦器(第3図4) 小皿である。胎土は微砂粒を多く含む。口径8.0cm、器高1.3cm。

瓦質土器(第3図11) 体部は外傾し、口縁部は肥厚している。口端部に段をつくる。内面は横方向の刷毛目調整を施している。口径28cm。

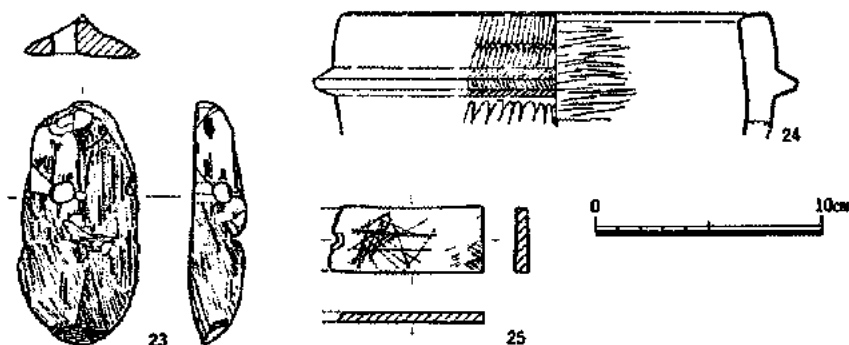
白磁(第4図12~15) 12は玉縁口縁をもつ白磁碗である。見込みに沈線をもち高台は低く、幅広く削っている。胎土は灰色。13は高台部を高く削ってつくり出している。体部下半に



第4図 野坂中山道跡出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

段をつくる。見込みは幅広く軸をかきとっている。胎土は淡灰色。14は高台付皿である。高台は明瞭で口縁部は外反する。体部内面に細い沈線がめぐり、軸は体部全面にかかる。口径 9.6 cm。15は体部が屈曲し、口縁端は尖る。見込みに印花文が描かれている。胎土は灰白色。口径 13.0 cm。以上の器種の他に口壳の皿が出土している。

青磁 (第4図16~20) 16・17は龍泉窠系青磁碗である。16の高台は外面を直に削っている。見込みに弱い沈線がある。胎土は炎青灰色で、緑色釉は底部にまでおよんでいる。17は口縁部が外反し、見込みに沈線をもつ。体部の内面には、沈線により区画された中に飛雲状文が



第5図 野坂中山遺跡出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

描かれている。胎土は灰色、釉は灰褐色。口径16.8cm。18は同安窯系青磁碗である。高台は高く、器面の削りは体部～底部へ明瞭にのこる。見込みに沈線がめぐる。内外面に櫛歯による文様が描かれている。胎土は灰白色、釉は淡緑色である。

第4図19・20は朝鮮の青磁と思われる。19の体部は内湾して立ち上がり、口端部は丸い。底部は上げ底状に高台をつくる。底部に目あとを4ヶ所もつ。胎土は灰色、釉は全面にかかっている。口径9.4cm。20は高台付皿である。体部は内湾して立ち上がり口端部は丸い。底部は低い高台をもっている。畳付は全体に目あとがついている。胎土は暗青灰色、濃緑色釉がかかる。口径11.0cm。

第4図21は青磁双耳小壺<sup>①</sup>である。口縁部は内傾し、口端部は内側に引き出される。体部は扁球形で底部は低い高台をつくる。体部上半は花卉唐草の浮文をもち、体部下半には蓮弁をもつ。体部の上半と下半は型押しで型どりして接合している。胎土は灰青色、底部付近は黄白色、釉は淡緑青色透明釉を外底部以外にかけている。器面にヒビが目立つ。器高6.3cm。

陶器(第4図22) 22は壺である。体部外面は削り、内面はなで調整痕をよく残している。底部は上げ底状に削っている。胎土は黄灰色、釉は黄褐色である。

以上の遺物の他に高麗青磁(図版2)や常滑窯等の陶磁器が出土している。

滑石製品(第5図23・24) 23は鍋の再加工品で鏝とみられる。長さ10.9cmあり、横断面は三角形となる。中央部をややよった位置に径0.9cmの穿孔をもつ、ほぼ中央部には×印を描くように紐状の縛り痕をのこしている。24は鍋である。口縁直下に鏝がめぐる。外面には削り痕をもち、煤を付着する。

砥石(第5図25) 扁平小型のもので、表裏とも磨いているが、使用痕は片面のみに残る。砂岩製であろう。

#### (4) ま と め

は場整備事業に伴う発掘調査のため、約 900 $m^2$ という小面積ではあったが、数多くの柱穴群を検出した。建物の規模、構造を容易に捉え難く、今後に課題を残している。

出土遺物は土師器・陶磁器等、多種にわたっているが、年代幅としては13～14世紀を主体にしており、この時期に集落が連続して営まれていたことがわかる。出土遺物の中には、さらに前後する時期の遺物が少量認められることから、集落の形成から、廃絶の時期については、遺物全体の検討を待ちたい。

当該時期の調査は宗像市郡では始めてであり、中世宗像の一端を提供している。遺跡は宗像市の南部、朝町谷の最奥部に位置しており、下流約1kmには11世紀を主体とする小集落跡の調査を行なっている<sup>②</sup>。また、石丸遺跡では14世紀前半の枢府衛<sup>③</sup>を出土している。

13・14世紀は蒙古襲来をはじめとして、動乱の時代であり、宗像の地においても、宗像大宮司家は社務家として祭祀を司どると共に、武家的様相を強めて、神領保全のための戦いを対外的に押し進めている。また大宮司家はこのことと併行して中国、朝鮮との貿易に力を入れていることがわかる<sup>④</sup>。このことは出土遺物の中の高麗青磁や中国南方産の壺などをはじめとする、輸入陶磁器によく表われている。

このような状況の中で、遺跡は集落として営まれていたが、その性格等の位置づけについては、今後検討を要するが、野坂中山墳墓地の調査と合わせると概要が明らかとなると思われる。

最後に、整理にあたり次の方々の指導、助言を戴いて報告をまとめることができました。厚く御礼申し上げます。

九州歴史資料館調査課長 石松好雄、主任技師 横田賢次郎、森田勉、高橋章、福岡市教育委員会文化課技師 池崎義二、森本朝子（敬称略）

注① Die Sammlung Eric E. Geiling

『CHINESISCHE KERAMIK AUF DEN PHILIPPINEN』MUSEEN KÖLN

『SOUTH-EAST ASIAN and EARLY CHINESE EXPORT CERAMICS』William Sorsdy Ltd 1974 他

注② 1980年11月調査。溝のみを検出したが、おそらく集落を区画するものと思われる。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、青磁、白磁、石製品等である。土師器の中には北九州市域的特徴を持つものが認められる。

注③ 横口達也『石丸遺跡』宗像町文化財調査報告書第4集宗像町教育委員会 1980

注④ 宗像神社復興期成会『宗像神社史』1961。下巻第16章「海外交渉」に中国、朝鮮との貿易を宗像大宮司家が積極的に押し進めた記録が見える。

まがりこうばたけ  
2. 曲香烟遺跡

(1) 概 要

当遺跡は、郡境にそびえる標高約 300m<sup>なびき</sup>の藤山から北西へと派生する丘陵の末端、標高約30mの地点に位置し、水田との比高差は約20mある（第1図）。北方には眼下に宗像盆地の主要水源である杓川が西流し、これを挟んで須恵クヒノ浦遺跡<sup>①</sup>が、また、南西方には光岡長尾遺跡<sup>②</sup>が、ともに標高30m余の丘陵上に占地している（第1図）。

『福岡県遺跡等分布地図 宗像郡編』<sup>③</sup>では、この地に3基の古墳、および弥生～古墳時代の散布地が記載されている（330323～330326）。

歴史的・地理的環境や、『遺跡分布図』の記載事項を考慮して試掘調査を行ったところ、2つの尾根上で堅穴遺構を確認した。そして本調査では、これらをおのおのA・B地区と称した。

なお、現地調査は福岡県文化課調査第1係長 宮小路賀宏氏を中心として、1983年9月～10月にかけて実施した。

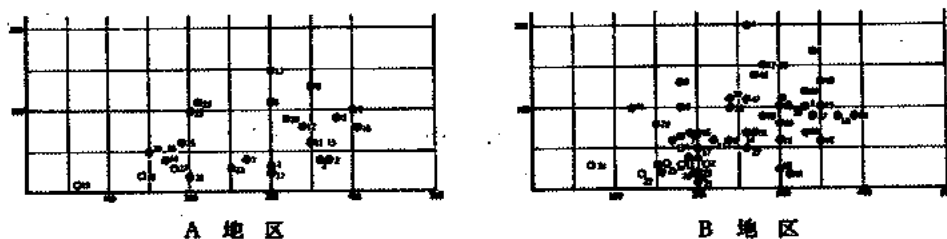
(2) 遺 構（第7・8図）

2つの尾根にまたがる調査区のうち、その南側をA地区、北側をB地区と称して略述する。

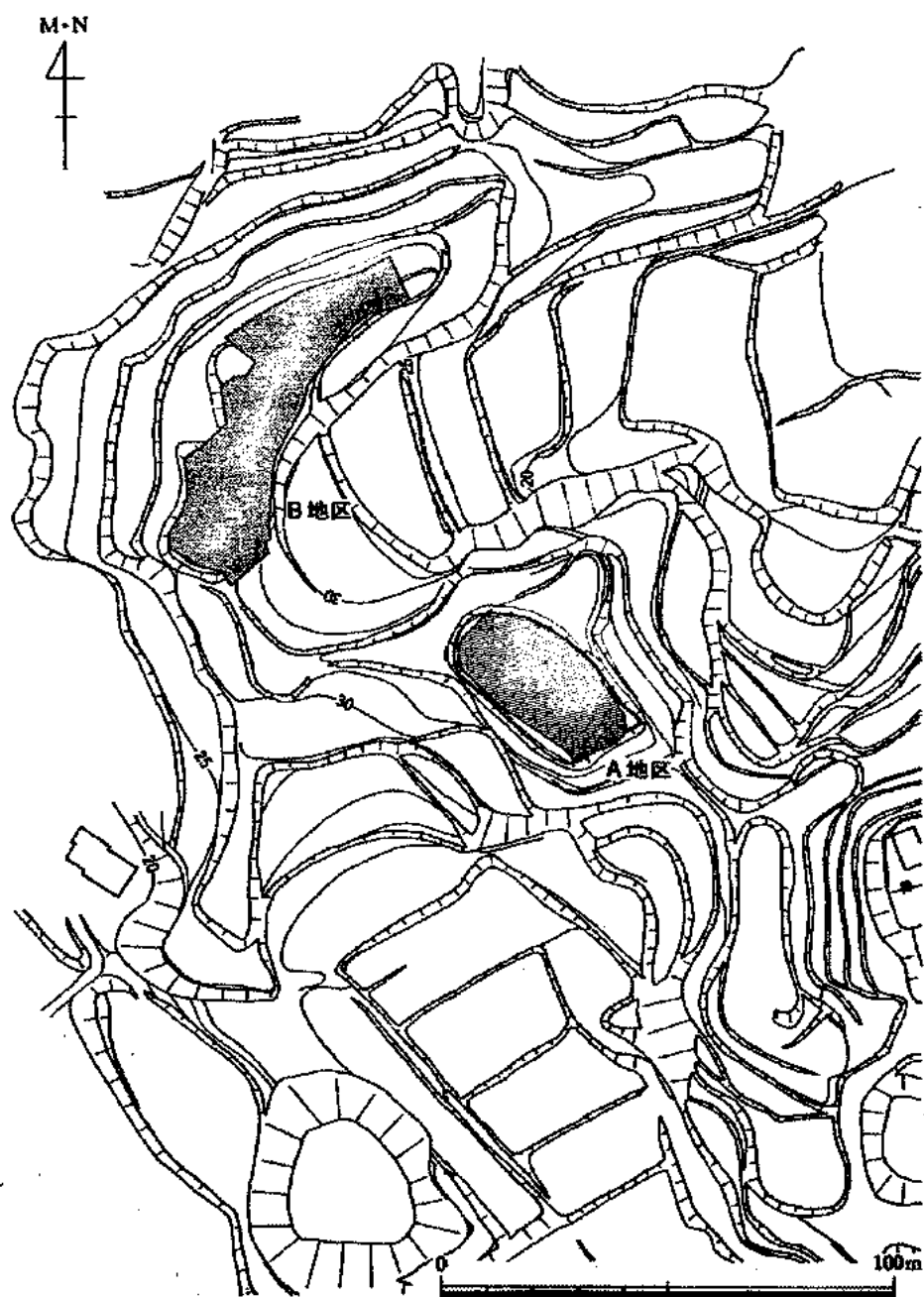
**A地区** ここでは26基の堅穴遺構とそれを切る環状溝を検出した。環状溝は幅約 0.4m、深さ約 0.2mの小規模なもので、復原径は約14mである。溝の南半は削平されているものの、西側は、幅約 2mにわたって掘削されない部分がある。しかし溝内からの遺物は皆無であった。『福岡県遺跡等分布図 宗像郡編』には、この地点付近に径約 8mの円墳の存在が記されており（筑前東郷330323）、この環状溝がその古墳の周溝であった可能性もある。

26基の堅穴遺構のうち、21基はいわゆる貯蔵穴（袋状堅穴）で、他の5基は浅い円形、または隅丸方形の土坑である（第8図）。これらの遺構の規模は、第2表に示したが、削平を受けているために深さは参考となるだけであって、原状は底面積の広狭に反映されると考えている。A

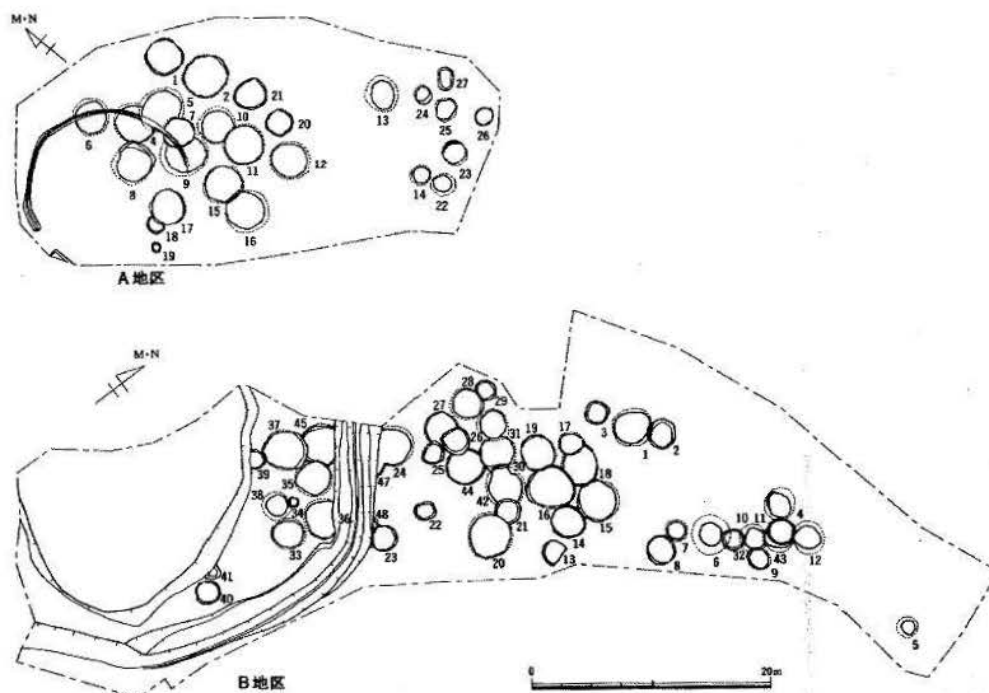
第2表 曲香烟遺跡弥生時代堅穴法量表（単位 cm）



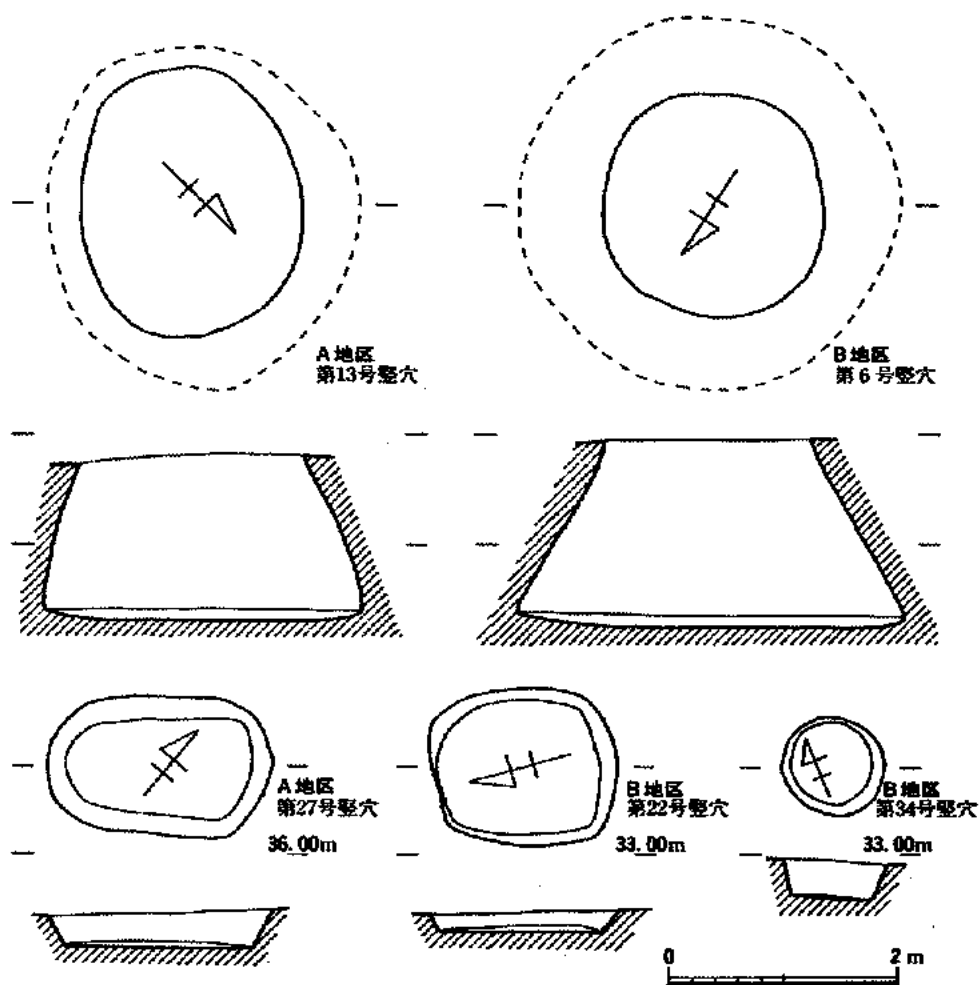




第6圖 曲香煙道路地形測量圖 (1/1500)



第7图 由香河遗址发掘出的 (1/300)



第8図 曲香烟遺跡壺穴実測図 (1/60)

地区検出の袋状壺穴の底径規模は、1.5 ～ 4.0mで、うち 3.0 m ～ 4.0mの大規模なものが、13基（約62%）と半数以上を占める。また、そのうちの12基が調査区の中央部以北に分布する。A地区の遺構検出面は、西北から東南にかけて約1 mの高低差をもって緩やかに下降するが、大型の袋状壺穴はより高い地点に掘削されて多くの切合関係をもつ のに対し、小型のものは下位の地点に営まれ、切合関係を互いにもたない。かつ、両者の間には約6 mの空白地帯がある。

**B地区** ここでは48基の壺穴遺構と、環状溝を検出した。環状溝は最大幅約4 m、深さ約

1.4 mで、断面の形状は逆梯形を示し、B地区西南隅の高台を繞るように掘削されている。溝の最下層には薄い粘土層が堆積しており、滞水状態で機能していたと推測できる。この環状溝から出土した遺物は弥生土器がほとんどだが、中に少量の糸切底をもつ土師器を含んでいた。他の陶磁器類の検出を確認していないために、時期の限定は困難だが、埋没は中世に遡るであろう。

竪穴遺構は48基を確認したが、いわゆる袋状竪穴は37基を数える。底径規模は第2表にみるように、1.5 m～3.5mの幅の中にまんべんなく収まり、A地区で認めるような規模の断絶は看取できない。

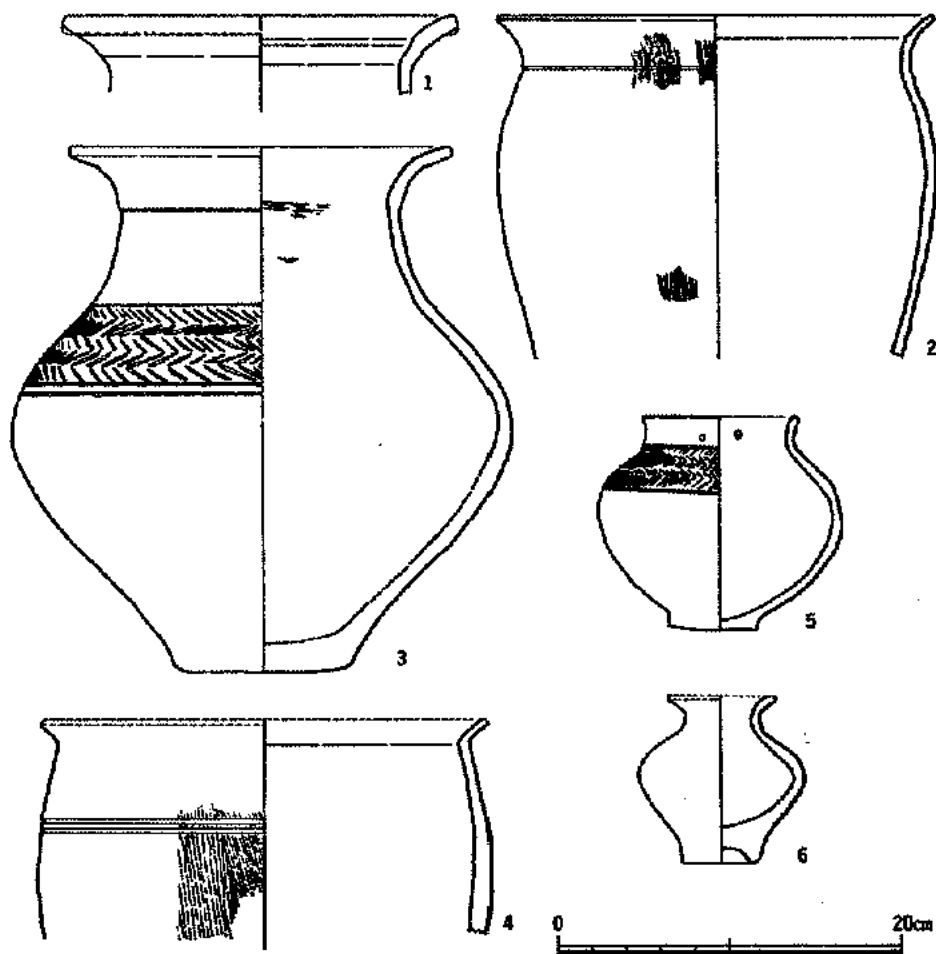
ここで検出した竪穴遺構群は、大きく4群に分けられる。また、更に細かくみるならば、調査区中央部付近の、2号・1号・3号、17号・18号・15号、19号・16号・14号、27号・28号・29号などの各竪穴遺構が3基を小単位として並んでいる様子が容易にわかる。また、40号・41号竪穴、7号・8号竪穴などのような2基1単位のまとまりをも認めるならば、48基のほとんどが2～3基で小単位を形成しているといえる。こうした小単位の追求は出土遺物の検討を待って果たしたい。

### (3) 遺物 (第9～11図)

竪穴遺構で検出した遺物は、土器・石器と若干の炭化物（炭化米・種子等）、そして多くの焼土塊がある。土器・焼土塊は、現在各竪穴ごとに整理箱に収納しているが、その総数は約150箱（A地区約67箱、B地区80箱）を数える。出土竪穴は偏在していて、A地区では2号竪穴に20箱、1号竪穴に26箱、B地区では45号竪穴に33箱分が集中していたが、他の大部分の竪穴は1箱足らずを出土したのみであった。焼土塊は穀類や禾本科植物の圧痕を残し、かつ垂木と思われる圧痕を残すものがあり、天井の被覆施設が焼け落ちたものと考えられる。

石器は総体的に少ない。器種には、石庖丁・柱状片刃石斧・太型鋸刃石斧・砥石・磨石・叩石などが存在する。以下に、土器・石器の順に図示した遺物について略述する。

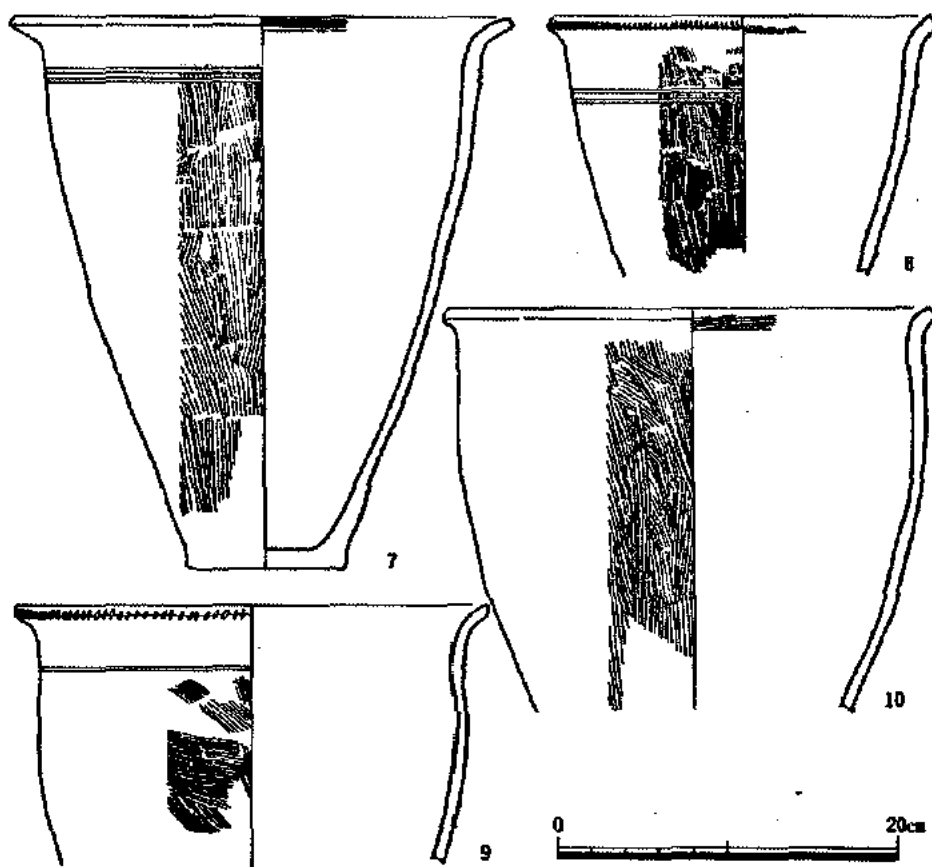
土器 (第9・10図) 第9図1は口縁部内面に鈍い段を持つ壺である。段の形成は粘土紐貼付ではなく、主に強く横撫でする技法により、そのために外面も緩く曲線を描く。2は1と共伴の壺で、頸部下に刷毛目原体を押捺した甘い段を付す。3・4も一括出土の遺物である。3は口頸部・頸腹部の境に段を繞らせる、器高約30cmの壺。文様帯とそこに充顔された無軸羽状文はいずれも2枚貝を用いて刻まれている。4は風化・剝落が著しく、口縁部の原状は不明だが、頸部からかなり下った位置に2条の篋描直線文を施す。5・6はほぼ完形の小品。5は短頸壺で、頸部の相対する位置に2孔1対の紐孔を穿つ。文様帯の界線および無軸羽状文は篋状工具で行う。6は胴部最大径が中位に位置し、底部は極めて厚く、高台状を呈する。第10図7～10はB地点37号袋状竪穴一括出土の壺である。おのおの如意形口縁を有し、頸部は無文の



第9図 曲香畑遺跡出土遺物実測図Ⅰ(1/4)

もの(4)、1条(9)・2条の篋描直線文をもつ(7・8)ものがある。なお、8の篋描直線文はら線状を呈する。調整技法は、胴部外面に縦あるいは斜位の刷毛目、口縁部内面は横刷毛、胴部内面は撫で調整が多用されている。

図示した以外の土器についての特徴を以下に略述する。壺は、口縁部内面に粘土帯を貼付けて肥厚させるものや、同じく内面に断面三角形の突帯を付すもの、口端部内面に複線鋸歯文や平行線文を施文したものなどがある。外面の装飾については、段・断面三角突帯・幾可学文などが様々に組合されているが、肩部文様帯に限れば、大部分が無輪羽状文で、有輪羽状文は少なく、木の葉文は管見に触れていない。また施文方法は2枚貝の腹縁を押捺した遺物が多数を

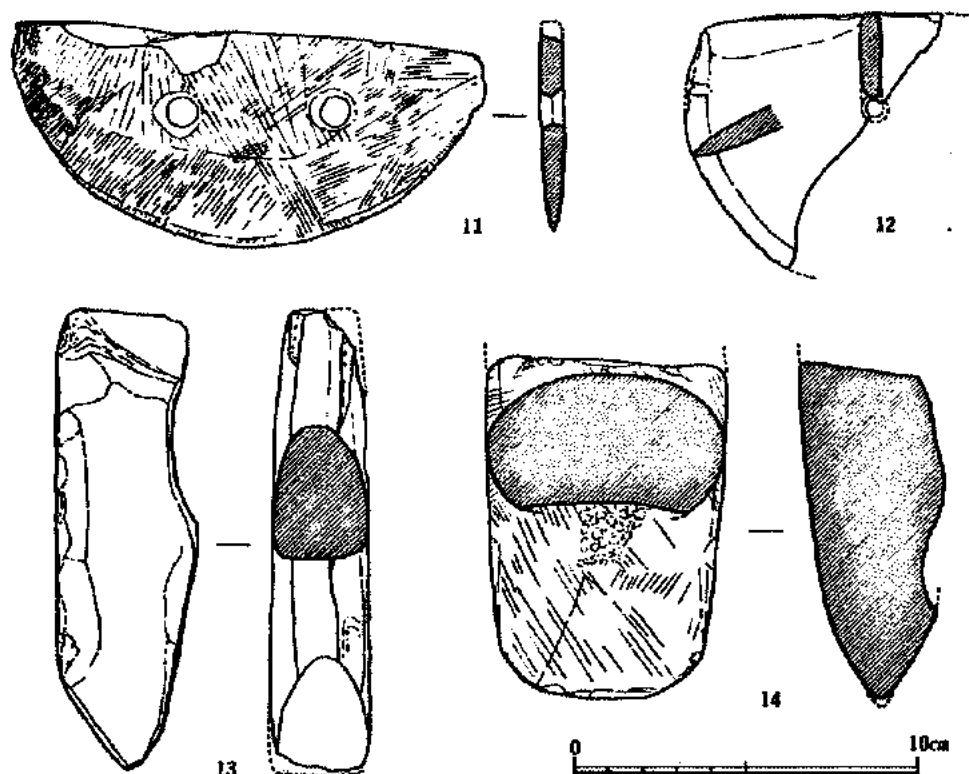


第10図 曲香煙遺跡出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

占める。底部の形態は平底の例が多いが、中に上げ底風のものも混在する。

甕は如意形口縁を有し、頸部直下に1～2条の篋描直線文を施すものがほとんどで、突帯を有する例は少ないようである。また、竹管文などを併用する個体も乏しい。底部は主に平底である。以上の他に、傘形の甕用蓋や頂部に孔を穿った甕用の蓋、土製品として土鍾などを検出した。

石器(第11図11～14) 11・12は凝灰質粘板岩製の半月外彎刃石庖丁。1は背部を欠損するが、ほぼ完形に近い。刃部は約2mmの幅で両側から砥ぎ出している。厚さは約8mm。2は1に比して刃部が大きな曲線を描く。刃部は、約6mmの幅にわたって両側から砥ぎ出す。厚さは7mm。3は砂岩ホルンフェルス製の挟入柱状片刃石斧で器表の風化、剝離がかなり進行している。刃部は幾分欠損しているが、全長は14cmに近い。また、挟りは甘い。4は凝灰岩質細粒砂



、第11図 曲香畑遺跡出土遺物実測図Ⅲ (1/2)

岩製の太型蛤刃石斧。刃部幅は約6cmで、それに斜交する細かな使用痕が観察できる。

#### (4) ま と め

以上が本遺跡の遺構・遺物の概要である。遺跡は弥生時代の堅穴、ことに、袋状堅穴を中心とする生活遺跡である。この小支丘上では、調査区が最も高位に位置しているが、範囲内に住居跡を想定しうような空間は存在しない。曲香畑遺跡の南方に眺める光岡長尾遺跡で、50数基の袋状堅穴が周囲に環溝を繞した状態で単独で検出されたように、あるいはこの丘陵でも袋状堅穴のみ営まれていた可能性もある。

現在までに宗像盆地内で遺構を検出した弥生時代前期の遺跡は次のような例がある。すなわち、石丸遺跡<sup>⑦</sup>、名残遺跡群<sup>⑧</sup>、須恵クヒノ浦遺跡、光岡長尾遺跡、久原瀬々下遺跡<sup>⑨</sup>、そしてこの曲香畑遺跡である。遺構は、袋状堅穴・土坑と溝のみで、住居跡や墓は確認していない。

これらはいずれも、釣川および朝町川の流域に立地する。各遺跡の標高は、久原瀧々下遺跡が約10m前後であるほかは、いずれも30m余を測る。また、遺物散布地も、標高10m以上に限られている。こうしたことから、弥生時代には宗像盆地内の標高10m以下の土地は利用が困難であったと想定できる。また、標高10mより高位の平地は、光岡長尾遺跡の周辺（この縁辺に曲香烟遺跡・久原瀧々下遺跡が立地する）、および釣川上流の大字武丸・吉留などの地域（この周縁に石丸遺跡・名残遺跡群などが立地）が最も大きな生産力を有していたことが推測できる。一方、須恵タヒノ浦遺跡に居住した人々は、谷水田を基盤にしていたのであろう。

次に遺物についてまとめてみたい。なお、石器は点数が少なく、除外する。

未整理であるが、瞥見した中には、壺、甕、壺・甕の蓋などがある。壺のほとんどは、肩部に文様帯を有し、また、口縁内面が肥厚するものが多い。口縁・頸部、頸部・胴部間の段は、やや甘いが明瞭である。中には刷毛目原体を用いて形成したものがあり、また、甘い突帯を段の位置に繞らしたり、胴部文様帯の上段に断面三角突帯をもつものもある。口縁部内面に粘土帯を貼布したり、鋸歯文などを施文するもの、断面三角突帯を付するものがある。底部は平底に混って、高台風の上げ底を有するものも混る。

甕の大部分は如意形口縁のものだが、口縁内面に粘土紐を貼付して肥厚する、いわゆる金海タイプの土器も出土した。中には、刻み目を施した口縁部を直角に折り曲げ、その下方に縮描直線文を施すものや、縄文時代晩期の鉢のように、外反する口縁部の下に弱い稜をもって内彎する胴部へと続く特異な形態のものが存在する。沈線を断面三角突帯に代える中期的なものや刻み目突帯を付す、いわゆる亀の甲タイプの甕は少ないが、あるいは皆無に近い。3条以上の沈線を施すものもきわめて少ないようである。

地理的に、福岡平野と関門地域との中間地点に位置する曲香烟遺跡の土器群は、施文の諸要素は関門地域に近く、いわゆる高機式土器の影響を強くうけている。また、一方では、縄文的といわれる高台状の上げ底をもつものや、肩部で屈曲外反する甕などもあって、複雑な様相を呈している。

宗像盆地の弥生時代の歴史は従来空白に近く、ここ数年間に相次いで、袋状堅穴を中心とする遺構・遺物が検出されているものの、住居跡、墓地などの遺構は乏しい。従って当時の生活文化の総体を把握するまでにはまだまだ時間が必要である。しかし、遺物の量は充実しつつあり、関門地域と福岡平野の両文化圏の中間地域として、今後の研究によって両者の関わり方などに良好な資料を提出しようと考えている。

注① 弥生時代前期の袋状堅穴、弥生末～古墳前期の住居跡のほか多数の柱穴を検出している。これら弥生時代の遺構の上面に、墳長30数mの前方後円墳（6世紀後半頃の築造）が営まれる複合遺跡、現在整理中。



注② 1982年調査。京都府までの日本南沿岸に分布する土笛（陶埴）を出土したことは興味深い。現在整理中。

注③ 福岡県教育委員会 『福岡県遺跡等分布図 宗像郡編』 1977

注④ ここでは、壁体がせり出して、断面が三角形に近い形態をもつ、あるいは、そのような原状を推定できる遺構をこう呼ぶ。

注⑤ 底径は、（最大径＋最小径）× $\frac{1}{2}$ で算出した。

注⑥ 石材の鑑定は北九州市立自然史博物館藤井厚志氏の御教示による。

注⑦ 1977年調査。袋状堅穴（報文中では貯蔵穴）11基などを検出。弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

宗像町教育委員会「石丸遺跡－宗像郡宗像町大字石丸所在遺跡の調査」『宗像町文化財調査報告書 第4集』 1980

注⑧ 袋状堅穴を散発的に確認している。現在調査中。

注⑨ 1982年調査。中心は古墳時代初頭、庄内式に並行する時期の集落である。整理中。

注⑩ 森貞二郎「九州の弥生文化の発展と地域性－九州－」『日本の考古学』3 1966

もちやまどう    うえ  
3. 用山堂ノ上遺跡

(1) 概 要

遺跡は宗像市の西北に位置しており、背後の山は宗像郡福岡町・津屋崎町との境となっている。遺跡前面の谷間は狭く、深く開折しており集落の下流は宗像市民の喉を調するためのダムが作られている。

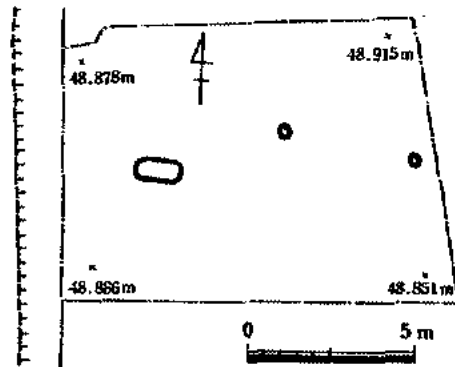
遺跡の北方では、町境から東側へ伸びる丘陵上に古墳群が確認されている。

用山集落から北西へ通る1本の交通路は、標高約70mの町境の峠を越えて津屋崎町の奴山へと抜ける。奴山は宗像郡における古墳時代の中心地であり、県教育委員会の発掘調査により、古墳時代の前方後円墳をはじめとして、貴重な調査資料が提供されている。

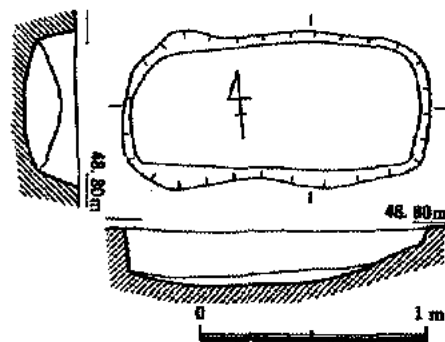
(2) 遺 構 (第12・13図)

遺跡は前年度の試掘の結果から、ほ場整備事業区内の標高50mを前後するところに、柱穴を主体とする遺構を確認していた。本年度のほ場整備事業に先立ち、破壊される部分の表土剥ぎ作業から入ったが、約100㎡の区域内においてわずか3基の堅穴を検出するに終った。このうち2基は小堅穴で柱穴と思われるが建物の構造については不明である。

第1号堅穴は隅丸長方形の堅穴で、長軸134cm、短軸69cm、深さは最深部で24cmであり、東側の床面が高くなっている。土壌墓と考えられるが確定できない。無遺物であった。



第12図 用山堂ノ上遺跡遺構配置図  
(1/200)



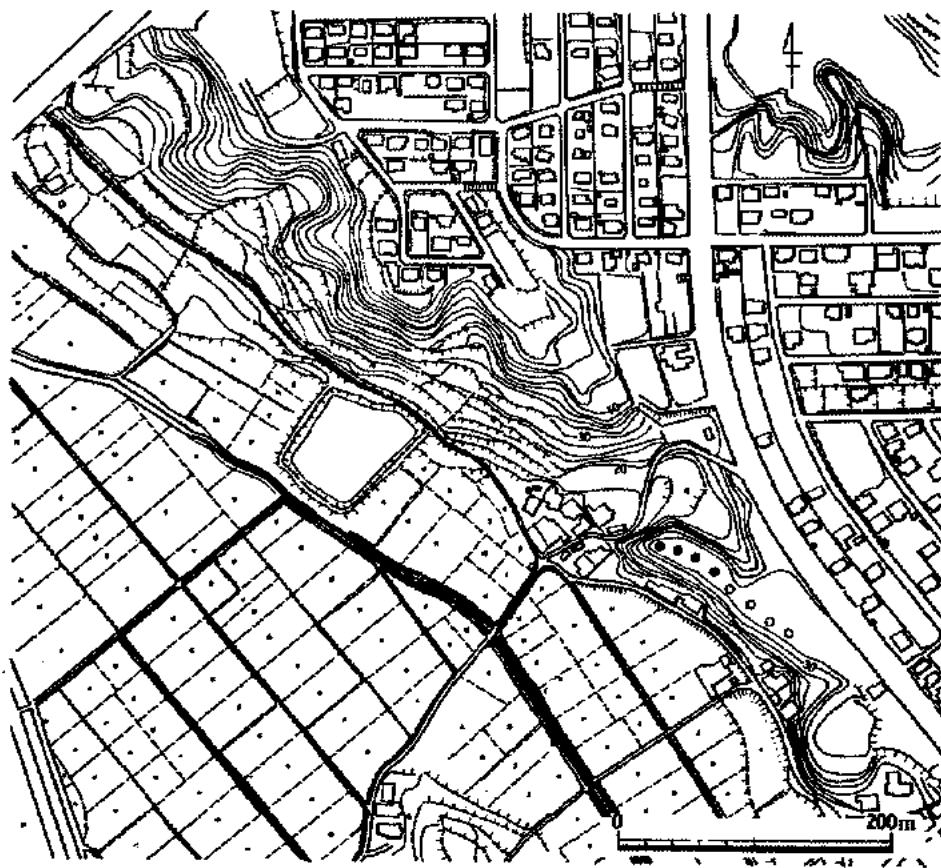
第13図 用山堂ノ上遺跡第1号堅穴実測図  
(1/30)

あさまちみょうけん  
4. 朝町妙見遺跡

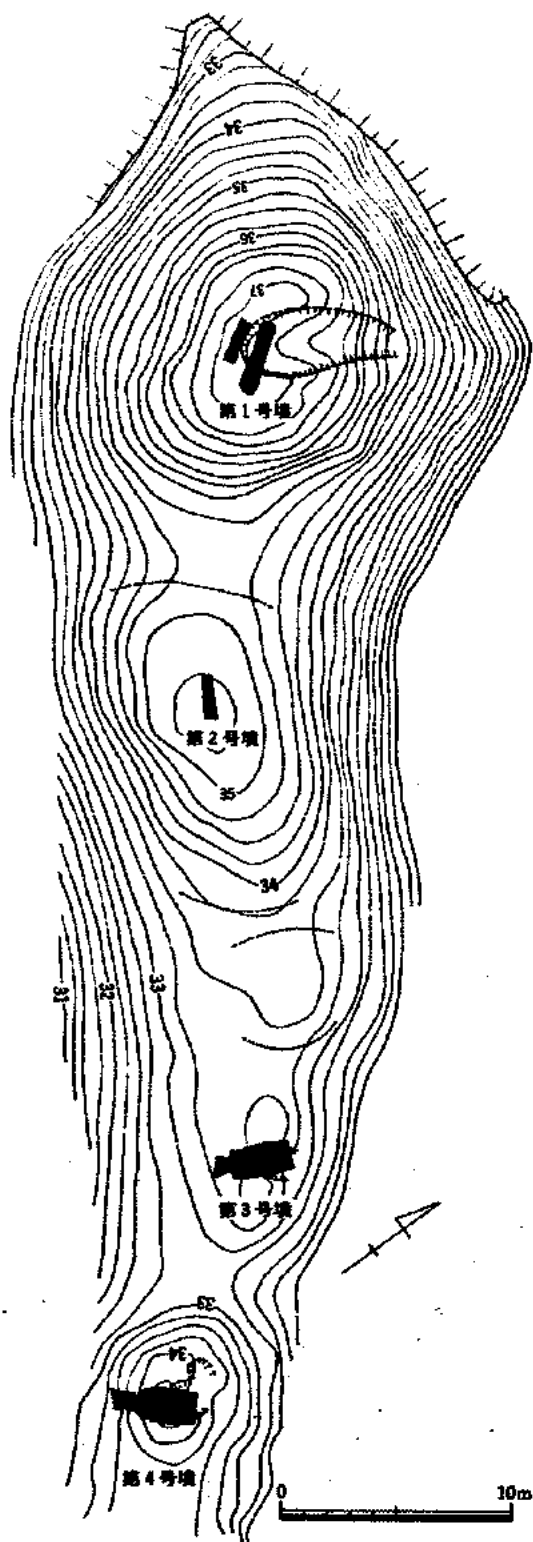
(1) はじめに

郡境にそびえる標高約 300m の藤山から北西へと派生する丘陵は、福岡・北九州の両 100 万都市の通勤圏内に位置することから 1960 年代に大規模な開発が行われた。大型団地「森林都市」である。当時、文化財行政の体制は確立されておらず、造成地内の遺跡は破壊した。当遺跡が位置する「森林都市」の西南部に小さく張り出した尾根は、幸いにして破壊をまぬがれ、わずかに開発以前の旧状をしのばせていた。しかし、災害防止のため、1983 年 10 月から 11 月にかけて緊急発掘調査を実施した。

この小尾根は、かつて採石場であったといわれ、西側は大きくカットされ、現在麓に民家が



第14図 朝町妙見遺跡地形図 (1/5000)



第15図 朝町妙見遺跡地形測量図 (1/300)

建っている。東側には深い谷を挟んで「森林都市」の幹線道路が南北に走る。谷から尾根の最高点までの比高は約15mあり、尾根裾の幅は約50mを測る(第14図)。

『福岡県遺跡等分布図 宗像郡編』には、この地に1基の前方後円墳と2基の円墳の所在が記されている(筑前東郷330469)。これは、第1・2号墳が他の2基の円墳よりも一段高い地点に位置し、かつ植林などのために墳形の確認が困難であったために誤認したものであった。

発掘当初、墳形確認のために、尾根に平行する全長25mのトレンチを設定した。この発掘の結果、従来前方後円墳と推定されていた部分のくびれ部で、幅約3mの黒色土層を検出し、これが2基の古墳であることを確認した。

以下に調査の結果を古墳ごとに記述するが、各古墳を尾根先端部からそれぞれ第1～第4号墳と呼称する(第15図)。また、記述の便宜上、尾根先端部側を北と呼ぶ。

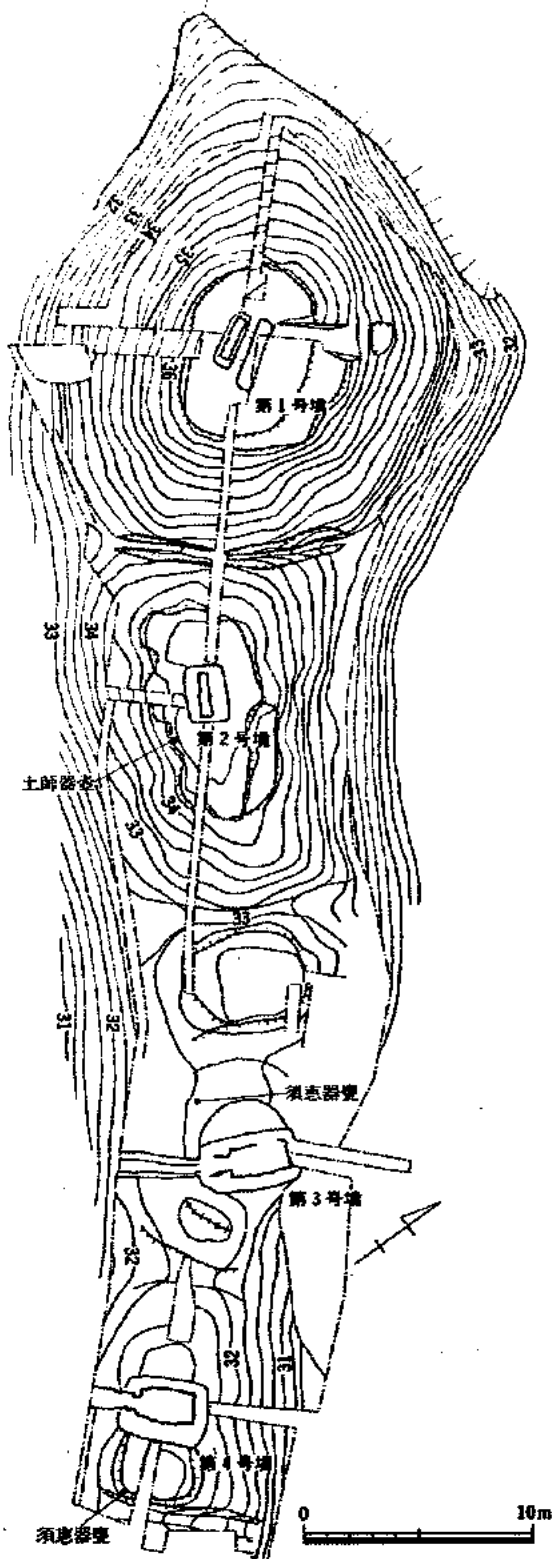
## (2) 第1号墳 (第17～20図)

**墳丘** 尾根の先端部かつ最高所に位置する。調査前、前方後円墳の後円部とされていた部分で、最高点の標高は約37.1mを測る。第2号墳との間のくびれ部の標高は34.8mで、墳頂部との差は2.3mある。墳丘の北側および西側は大きく削り取られているが、掘

高35mのコンターが長径約16m、短径約14mの楕円を描くことから、径15m前後の円墳と推定された。

墳頂部東寄りに浅い盗掘坑があったために、東向きに開口する横穴式石室を予想し、墳丘を4分割して盗掘坑の南側の区画を掘り下げて行ったが、盗掘時の残片と思われる鉄器を含んだ粘土や2枚の石を検出したのみで、天井石は見つからなかった。粘土は石室の目張りに用いられたものの残片と考えていたために、これもはずして行った。花崗岩バイラン土からなる地盤を確認したところで、畔のセクションに、厚さ約10cmの粘土層を確認したが、当時は粘土埴子予想していなかった。しかし、墳丘中心部から南へ約2.7mの地点で、地盤が直角に近く立ち上がり、約4mの位置まで平坦な面を形成していることを知りえたために、この平坦面を追求して墳頂部を削いだ。その結果、南北（尾根線にほぼ平行）に約7.5m、東西に5mほどの規模をもつ扁円形の平坦面と、2基の埋葬施設を確認した（第16図）。盛土は、この平坦面上にのみ盛られており、その厚さは40cmほどにすぎない。

墳丘の南で検出した溝は、幅2.8m、深さ1.3mの規模で、尾根線に直交するが、東西には続かない。また、北側は発掘に危険が伴うために確認していない。墳丘は地山を削り出して成形しているため北畔および東西畔の土層観察では墳丘規模は不明であった。第1号墳を尾根か



ら切り離すために掘削されたと考えられる溝の溝底中心線から、墳頂部平坦面の中心までの水平距離は約9mあり、単純計算すれば、径18m前後の古墳に復原できる。これは、ほぼ34mの等高線に一致する。しかし、尾根線と直交方向では同じ等高線の間隔が約14mとなる。この現象は、やせた尾根上に占地するという地理的条件に規制されたもので、築造時に扁円形あるいは長方形の墳丘を意識したと考える必要はなかろう。

墓石や埴輪などは用いられておらず、墳形を決定する根拠をもたないが、地山等高線には積極的にコーナーと断定できる部分はなく、円墳としておく。

主体部（第17・18図） 墳頂部平坦面の長軸に主軸を合せた2基の埋葬主体を検出した。粘土槨（第1主体部）と組合せ式箱式石棺（第2主体部）で、墓壇の切合関係からみて第1主体部が先行する。

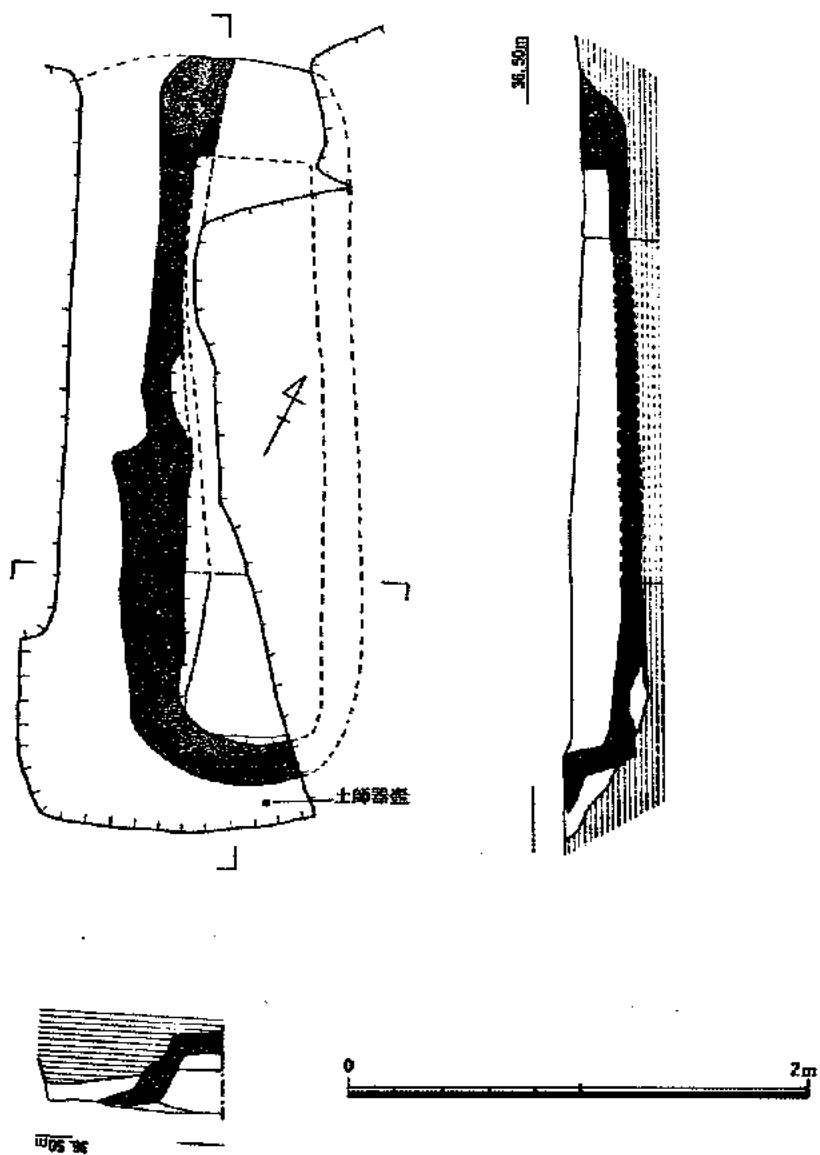
第1主体部は、長さ3.4m、幅1.3m以上の墓壇の中に、3.2×推定0.8mの粘土槨を埋置している（第17図）。用いられた粘土は黄褐色を呈し、必ずしも精良ではない。木棺を納めたと推測される部分には、パイラン土が一樣に混在していて、その横断面は箱形となる。粘土棺床の厚さは約10cmで、被覆粘土が一部残る北側小口部では、両者の間に赤色顔料の薄い層を観察できた。

掘形や粘土棺床の下位には何らの施設もなかった。粘土棺床は、南へ向って緩く下降しており、頭位は北に求められる。

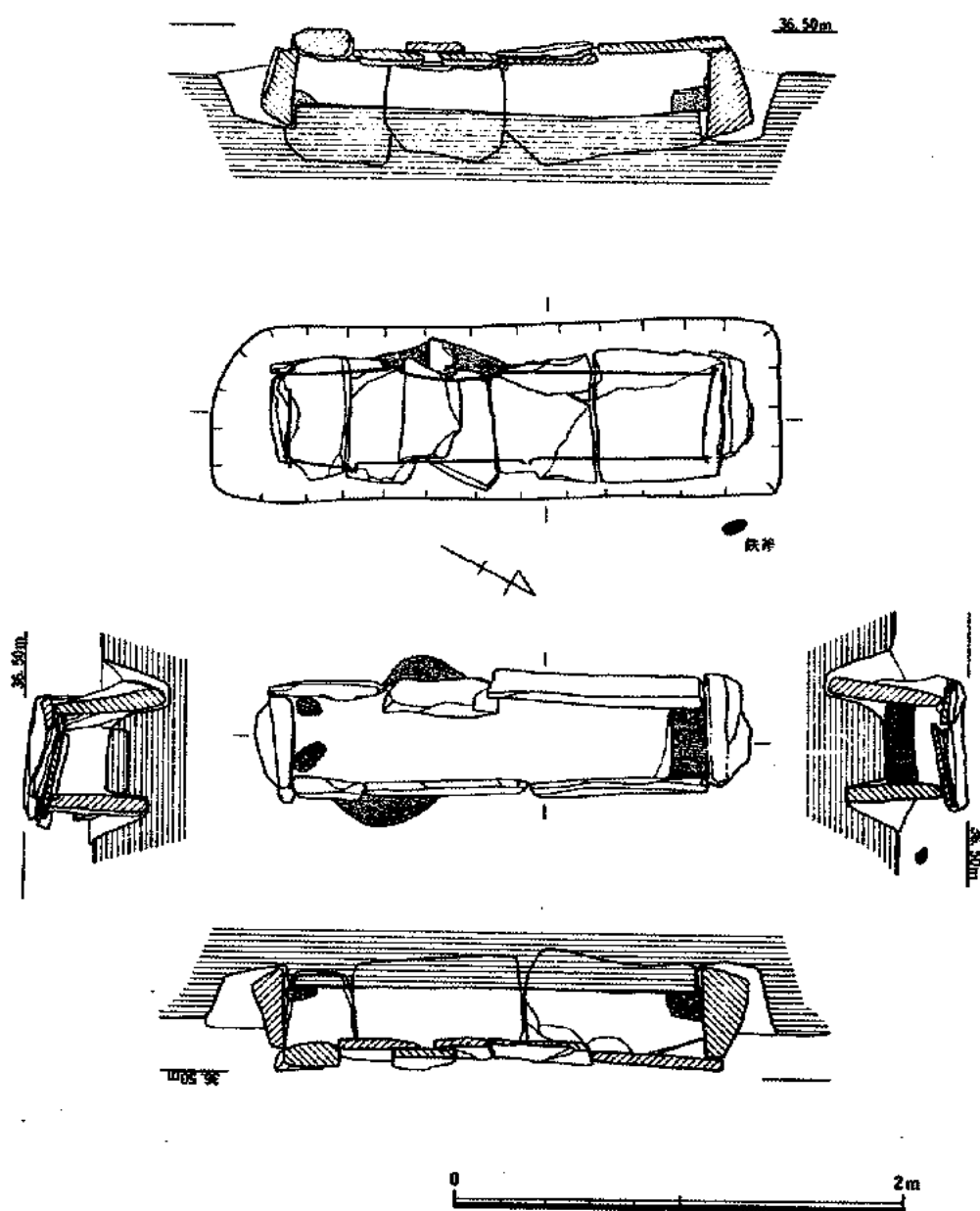
第2主体部は主として砂岩を用いた組合せ式箱式石棺で、2.6×0.8mの長方形の墓壇の中に、埋設する（第18図）。左右両側壁に各3枚、両小口に各1枚、そして天井部の6枚で構成されるが、いずれもが、被葬者の頭位により大きい石を用いている。また、小口に使用した石の掘込みは側壁に使用した石よりも浅い。棺の内法は1.8×0.4m、高さ0.3mである。北側小口には、棺材に接して粘土を敷きつめ、上部を緩く凹ませただけの枕を付設し、枕のすぐ下には頸骨・歯の一部が遺存していたが、風化が著しい。棺内の全面にベンガラを塗布していた。

遺物（第19・20図） 土器と鉄器が出土した。Iは第1主体部掘形内から正立した状態で2・3は溝埋土中から、折り重なって出土した。同じ個体の破片を墳丘斜面でも出土しており、墳頂部から転落したものであろう。鉄器は、第2主体部の北東、第1主体部との間で検出したが、第2主体部の掘形内に位置することから、箱式石棺に伴うものであろう。これも重なりあって出土した。また、墳丘斜面から糸切底をもつ土師器も出土している。

第19図1は、土師器広口壺で、口径約18cm、器高37cmの大型品。口縁部は小さく蛇行して広がり、端面はやや凹む。これは口端部内側を強く横撫でた結果で、内側上方へつまみ出される形態となる。胴部は、倒卵形だが、底部は尖らずに平底風である。器壁は薄く、厚さ3mmほどである。口縁部外面は縦位の、内面は横位の刷毛目調整を施すが、内面のそれは川西宏幸氏が円筒埴輪の研究で用いた「B種ヨコハケ」<sup>⑧</sup>と同種である。強く反転する頸部は横撫で調整、

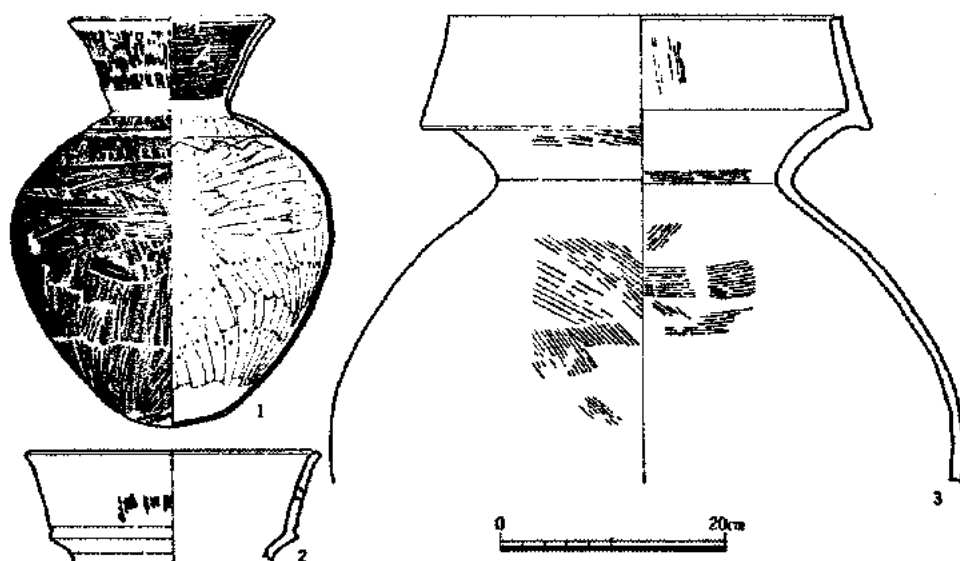


第17図 朝町妙見遺跡第1号墳第1主体部実測図 (1/30)



第18図 朝町妙見遺跡第1号墳第2主体部実測図 (1/30)



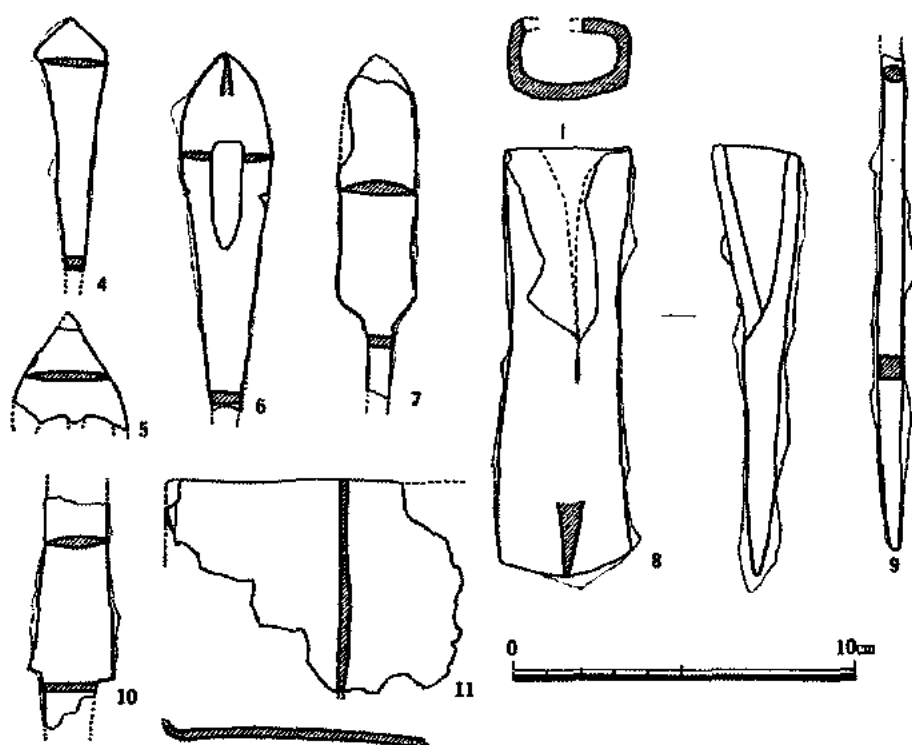


第19図 朝町妙見遺跡第1号墳出土遺物実測図Ⅰ（1／6）

胴部外面の調整は、上半では横刷毛を中心に用い、下半は縦刷毛のみである。また、一条の篋描波状文が特徴的である。内面は丁寧な刮削を下から上へ、右から左へ施す。底部外面は刷毛目と櫛で併用するが、内面は風化しており断定できない。2は二重口縁の壺である。破片数は数十点に及ぶが、磨耗が著しく接合しえなかった。また、図示した部分は小片で、傾きは任意。口径も誤差が大きいであろう。口縁部は小さく外折し、断面は方形に近い。屈曲部外面は稜をつくり、その直上は明瞭に固む。調整は、外面にわずかの縦刷毛を残すのみで、ほかは不明。黄白色を呈し、焼成も甘い。3は口径約33cmの大型二重口縁壺。口縁部は内傾し、端面をもつ。胴部上半に明瞭な肩はなく、なで肩のしまりのない器形となっている。風化が進んでおり、刷毛目の痕跡をわずかに残すのみである。

第20図4～6は鉄鍔でいずれも茎を有する平根式。柳葉形で片丸造りの7も、大きさなどからみて鉄鍔であろう。8は細身の鉄斧で、全長13cm、刃部幅4cmある。袋部は折り曲げて成形する。肩はなく、身の中央部付近が最も幅狭く、楕形に近い。9は残存長15cmの不明鉄器。図下半は断面方形、上半は扁円形となる。11も不明鉄器。厚さ約2mmの鉄板の一端を小さく折り曲げる。9・11には木質など遺存していない。10は鉄槍であろう。茎は厚さ約2mmで幅広く作られている。身は両丸造り。以上の鉄器のうち、10のみは盗掘坑の粘土中から、他は一括出土。

以上の遺物の中で、殊に第19図1の広口壺は、古墳に供献・副葬された日常土器として重要である。

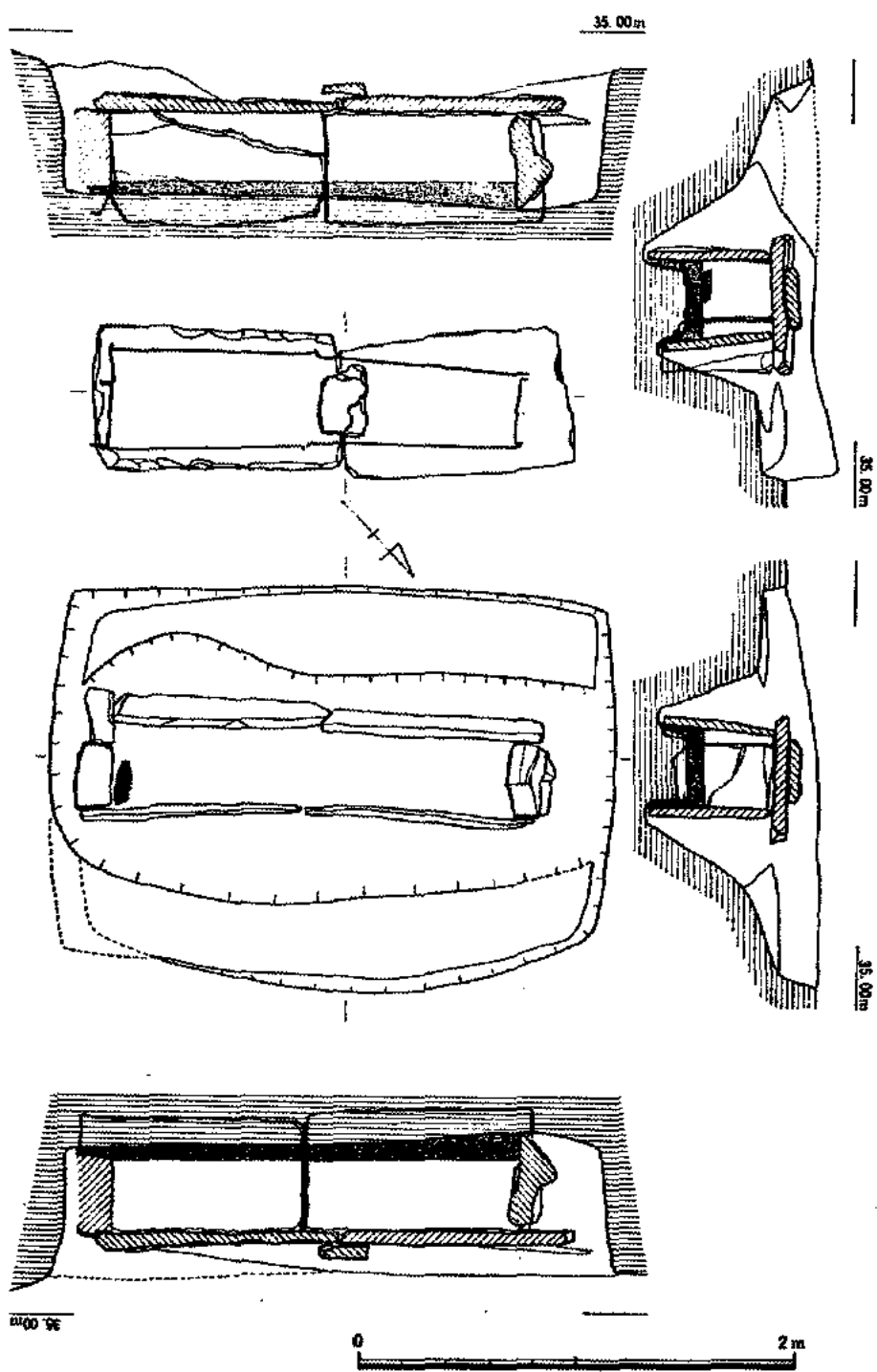


第20図 朝町妙見遺跡第1号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)

### (3) 第2号墳 (第21~23図)

**墳丘** 調査前、第2号墳の最高点は標高35.3mあり、第3・第4号墳最高点との比高は1mであった。南側の傾斜変換点は約33.75mの等高線上に、北側のそれは同34.75mにあった。この南北の傾斜変換点は、墳丘最高点から等距離に位置せず、墳形は長円形と予想していた。

発掘の結果、墳頂部には平坦面が削り出されており、その周縁を34.50mのコンターが長軸9m、短軸5mの幅をもって、矩形に復原できる状況で残っている。また、墳丘南側の33.60mコンター付近には黒色土が約70cmの厚さで堆積していた。これも、尾根斜面にかかるあたりで消えてしまう。墳丘の南端を尾根から切り離し、墓域の境を画するための溝であろう。この溝から主体部までの距離は約10m、第1号墳の周溝までは約16mある。一方、土層の観察では尾根に直交する方向で6.6mにわたって、厚いところで約30cmの盛土が認められた。この盛土は、頂部平坦面にほぼ限定されてなされていたのであろう。以上の観察から、第2号墳は長軸



第21図 朝町妙見遺跡第2号墳主体部実測図 (1/30)

約16m、短軸約5m以上の墳丘を有するといえ、コンターの状況はより矩形に近い。第1号墳と同様に、墳丘を画する外部施設は南端の溝以外になく、尾根の両側縁の傾斜が著しいために墳形や尾根線に直交する方向の規模は曖昧で、推測に近いことを付け加えておく。

**主体部（第21図）** 墳頂平坦部の中央部付近に、尾根に平行する、長辺2.6m、短辺1.9mの墓壇を検出した。これは、二段墓壇になっており、盛土上から掘り込んでいた。石棺は、ほぼ同大の4枚の側壁と2枚の天井石、それに厚みのある3個の木口石を組合せる。天井石の接点には小型の板石を置いていたが、これはほとんど機能していない。木口と側壁の接点は、第1号墳第1主体部とは逆に、3か所で側壁が木口の外側に接している。また、掘り込みは側石の方が深い。内法は、長さ1.9m、幅0.35～0.5mで、南側が幅広い。底には約10cmの厚さで砂を敷いており、そこから天井石までの高さは0.3mある。棺内には土砂が流入していたがベンガラが彩かで、土砂の間に人骨片が見えた。この土砂を除去すると、南に頭位をとる仰臥伸展葬の人骨1体と、その大腿骨の上に頭骨など多くの骨を残すもう1体の人骨を確認した。伸展葬された人骨は、頸部のほかには足の一部の骨のみ遺存していた。九州大学解剖学教室の田中良之氏の所見では、伸展葬の人骨は女性の、その足位にまとめられていた人骨は男性のものという。

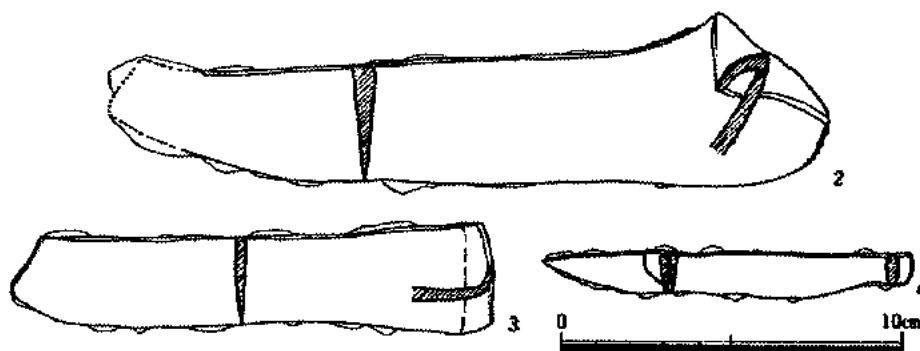
**遺物（第22・23図）** 遺物として、棺内女性頭骨の左上方にたばねた鉄器を、また、墳頂平坦部西南隅で上半部を欠損した土師器壺を検出した。1の土器は復元しえなかったが大型の壺の胴部下半の一片である。底部は丸底で、下半部は大きく膨み、丸底となる。外面には粗い平行叩きが観察でき、その上を刷毛目で、内面も刷毛目で調整する。数十点にのぼる破片の中に、屈曲する頸部小片が1点混在しており、二重口縁であったことがわかる。2は大型の鉄製直刀鎌。全長21cm、最大幅約5cm、背の厚さ0.7cm。柄の装着部は、背の部分を鋭角的に折り曲げて形成し、切先部は錆化著しく形状はわからないが、他遺跡の出土例からみて、図のように復元できよう。3は通有の大きさの直刀鎌。全長は14.2cm、厚さ0.3cm。柄装着部は小さく彎曲する。4は刀子で、中央部付近で折れ重なっているようである。現状で長さ10.8cm。関は不明瞭である。なお、第2号墳からは玉類を検出してない。

第2号墳から出土した遺物は以上に紹介したが、時期を特定できるものはない。ただ、鉄鎌に曲刀鎌を含まないことから、下限を6世紀前半頃に求めることは認められよう。上限に関しては、土師器壺にみられる叩き目から、4世紀代に遡る可能性が極めて強いといえる。



第22図 朝町妙見遺跡第2号墳出土遺物実測図 I

(1/3)

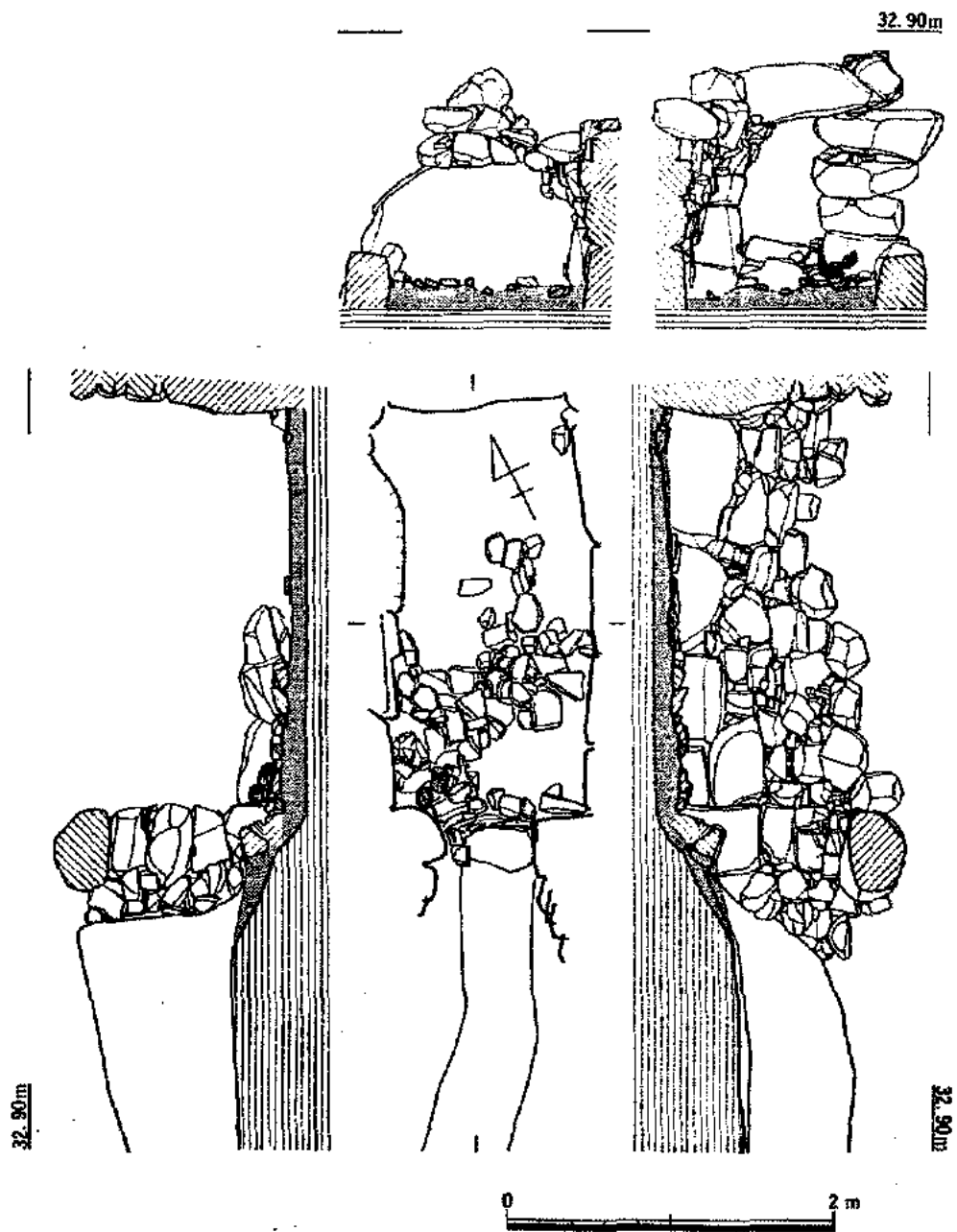


第23図 朝町妙見遺跡第2号墳出土遺物実測図Ⅱ (1/2)

#### (4) 第3号墳 (第24～28図)

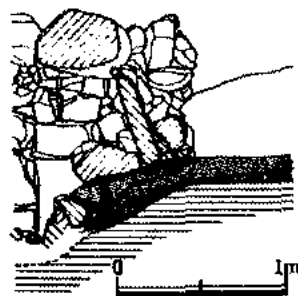
**墳丘** 第2号墳との間に小さな高まりを挟んで第3号墳が位置する。これも、墳頂部東側に盗掘坑と思われる凹みがあり、東面する横穴式石室を想定していた。しかし、西側畔のすぐ南側に西へ延びる墓道を確認したことから、西面する横穴式石室と判明した。石室は、尾根中軸線より、やや東側に偏して位置する。旧地表と思われる灰黒色土層の最高点から測った盛土の厚みは、南側畔で約0.8m、東側畔では1.7mある。また、北側畔には灰黒色土層はみられず、旧地形は北へ向って高くなっていたと思われる。この地山整形は径約8mに及ぶ。墳丘南半の灰黒色土層上には人頭大花崗岩礫が弧状に配されていた。整然としていないが地山整形ラインの周縁に位置しており、また玄門右上方の花崗岩礫に接して土師器高杯が数片に破砕された状態で出土したことから何らかの祭祀に伴う可能性がある。墳丘の北側では幅約3m、深さ0.4mの浅い溝を検出したが、これも完周せず、尾根斜面にかかるあたりで消滅する。南側でも黒色土層をみたが、明確な掘込みはなく、第3・第4号墳の間の凹部に自然堆積したもののようである。

**主体部 (第25図)** 西面する単室横穴式石室である。検出時には天井石が陥没しており、また左側壁も腰石1枚と袖石を残して崩壊していた。しかし、人頭大の礫と板石を用いた閉塞施設は完存していた。玄室は、2.6 × 1.2mの長方形プランで、残存高は約1.4m。石材は砂岩、礫岩を主に用い、花崗岩も混在する。袖石は、やや扁平な大石を横に4段積み上げて構成する。壁体はほぼ垂直に立ち上り、石積に整合する面は認められない。奥壁の腰石には、残存石材のうち最大の花崗岩を用いていた。敷石は、玄室前半部分しか残っていなかったが、第4号墳のものに比して大きめである。玄門をくぐってすぐ左側の敷石上で、土師器壺と須恵器平瓶を検出した。前底部の貼石は、長さ0.2～0.4mの短いもので、墓道側へ向って少し広がる。



第24図 朝町妙見遺跡第3号墳主体部平面図 (1/40)

遺物（第26～28図） 石室内から、玉類、鉄器、土師器盤、須恵器平版、砥石を、墓道・墳丘から土器を出土した。そのすべてを図示していないが、実測、計測にたえるものを掲げる。第26図～6・8は玄室床面、同1～5・7・9、第27図～11は墓道から、そして第26図～10、第27図～12は地山上から出土した。また、第4号墳との間の黒色土層中から出土した土器は、いずれの古墳に伴うものか判然としないために、一括して別個に取り扱う。

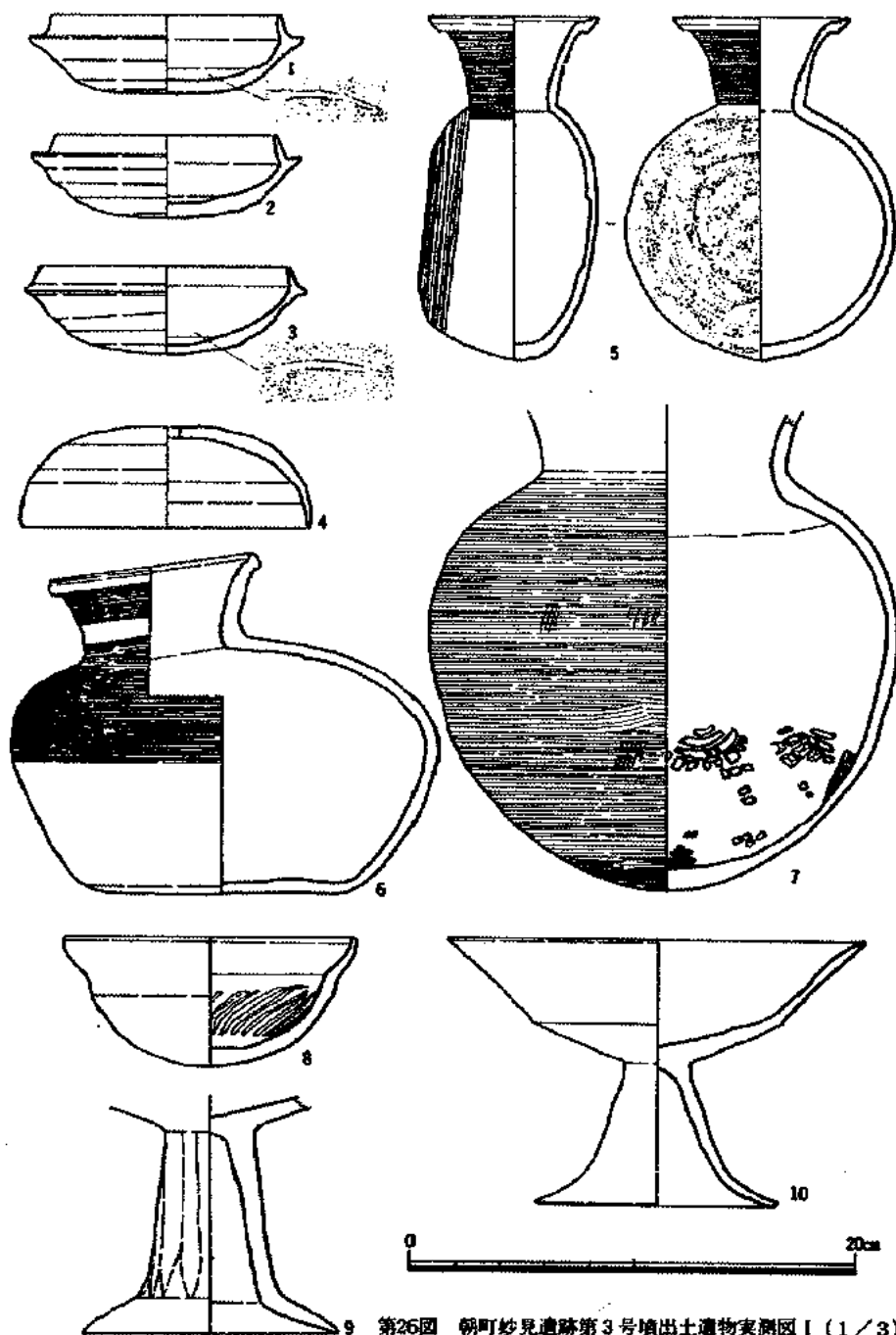


第25図 朝町妙見遺跡  
第3号墳主体部閉塞図 (1/40)

1～3は須恵器杯身で、受部の形状や立ち上りの内傾度に若干の相違点があるが、いずれも、口径10～11cm、器高3.5～4.0cmでほぼ同じ大きさである。調整手法も同様で、同一型式に属すると考えられる。また、1・3の内面底部付近には一文字の篋記号がある。4は須恵器杯蓋。胎土は粗く、焼成も甘い。5は提瓶で、口縁部は肥厚して受け口状を呈する。カキ目の手法が著しい。6は玄室内で潰れて出土。胎土は精良で、焼成も良好である。カキ目が著しいが、胴部下半は正置して左向き丁寧な篋削りで調整する。7は甕で、口縁部を欠損するほかは完形。胴部外面は、平行叩きの後に全面をカキ目で仕上げる。内面下半には特異な当具痕が印されている。これは、横山浩一のいう「車輪文叩き目」の一変種であろう。8は土師器盤。口縁部は内彎しつつ広がり、胴部は浅い球形を呈する。全面を丁寧な篋磨きで調整した後に、幅約3mmの暗文を左下から右上へと線状に施文する。色調はほぼ赤褐色を呈するが、胴部外面に黒斑がみえる。焼成はやや甘い。9・10は土師器高杯。9は柱状部内面に絞り痕が残る、外面は幅広い縦方向の篋削りを施す。10は地山整形時の祭祀に用いられたもので、検出時は、脚部は完形で、杯部は数点に破砕されて、約60cm四方の区画に散っていた。口径約19cm、脚部径約10.6cm、器高約12cmある。杯部、脚部ともに大きく広がる。器表の風化が著しく、調整痕は確認できない。11・12は大型の甕。11は口径22cm、器高43cm。12は10と墓道を挟んで対峙する位置に正立して据えられていたもので口径22cm、残存高23cm。外面はともに平行叩きの後にカキ目を施す。11の内面には同心円文と平行線文の2種類の当具痕が残る、後者は胴部下半のみに使用されている。

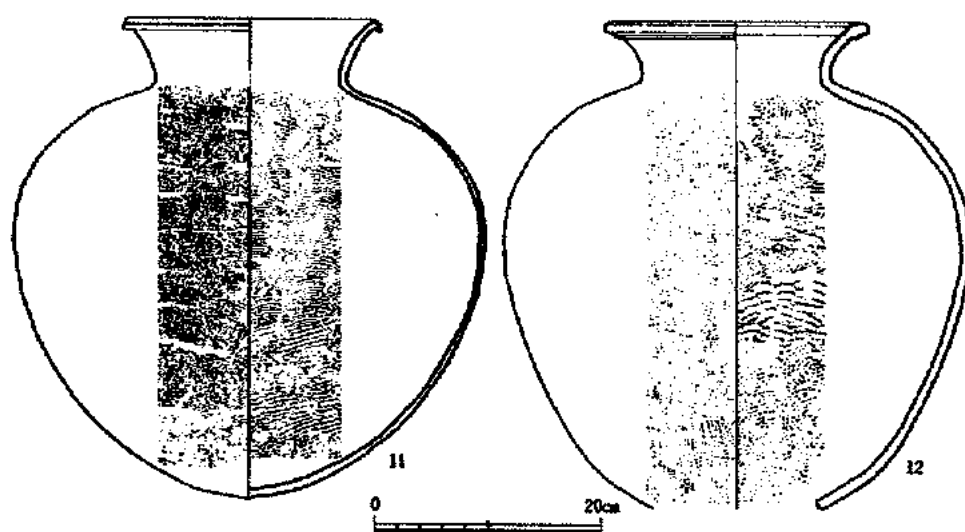
次に、玄室内出土の玉類、鉄器を説明する（第28図）。13・14はやや透明感のある赤褐色のメノウ丸玉。13は最大径2cmの大型品で、14は径0.7cm。15・16は琥珀玉で、出土時は完形を保っていたが、乾燥してヒビ割れてしまった。それぞれ長さ3.1cm、2.4cmである。17～20はガラス丸玉。17～19は保存状態が悪く、灰白色を呈し、20は黒色である。21は濃青色のガラス連玉。22もガラス玉であろう。これらはいずれも玄室前半部から出土した。

23～29は鉄鎌で、鎌身は7点を数える。いずれも長頸鎌であるが、鎌身の広狭で2形式に分類できる。その一つは鎌身の幅広い23・25・27・29で平根式である。他方は細根式の24・26・



第26図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅰ(1/3)





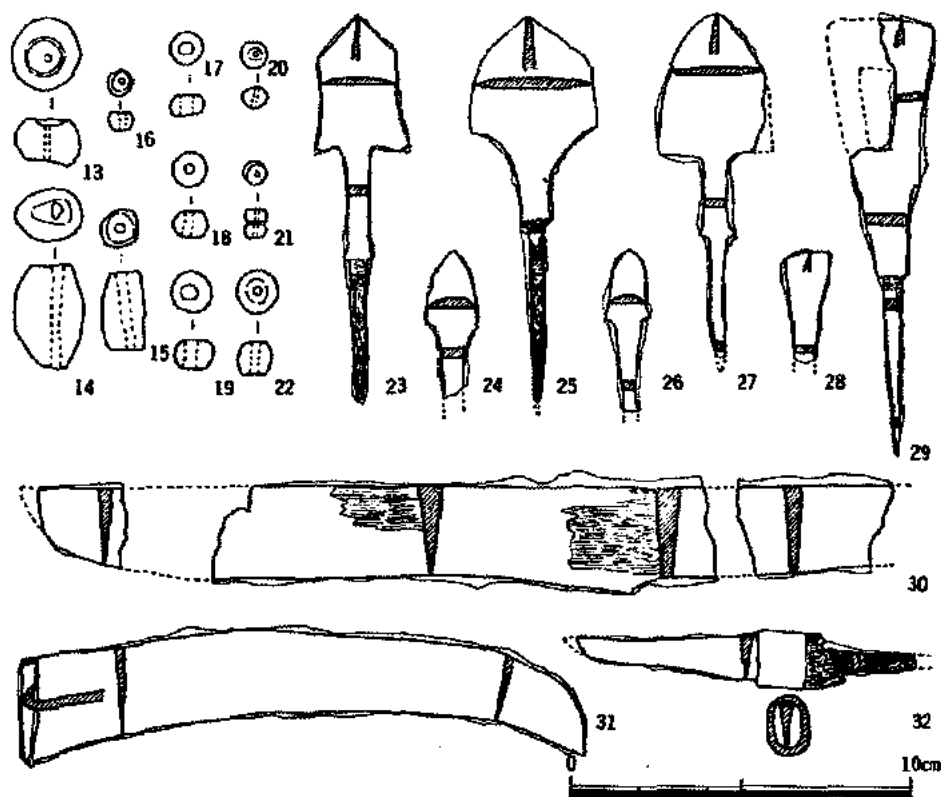
第27図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物実測図Ⅱ（1/6）

28である。壺頭式と呼ばれる28は両刃で、29は銚身下部に小さな逆棘状の突起をもつ。30は大刀片。身の幅約 2.7cmで、棟の厚みは約 0.6cm。関部はやや幅広くなり、片関のようである。身に鞘の木質が遺存している。31は鉄製曲刀鎌。全長16.5cm、背の厚さは約 0.2cm。先端部を欠くが、ほぼ完形である。32は、現存長10cmの刀子で、鉄板を折り曲げた柄縁金具が残る。

また、玄室右奥で、崩落した石材に押し潰された状況で人骨片を検出したが、小片であり、かつ風化していた。

この第3号墳では、先述したように小さな盗掘坑があったものの、土層の観察ではそれは浅く、石室に達するものではなかった。また、石室の上半を露出したところ、左側壁はみえず、天井石は傾いて右側壁が最高所に位置していた。左側壁が崩落した部分の土は変色していたが、これも盗掘を受けた形跡は認められなかった。以上のような調査時の所見から、本古墳は処女墳であったと考えている。後述する第4号墳との多くの類似性や立地関係を勘案するならば、追葬の行なわれる以前に石室が自然崩落したために、第4号墳を構築した可能性も否定できない。ただ、巨大な天井石を除去する際の攪乱を考慮しても、腰石が傾き、あるいは移動していた点に問題点は残る。

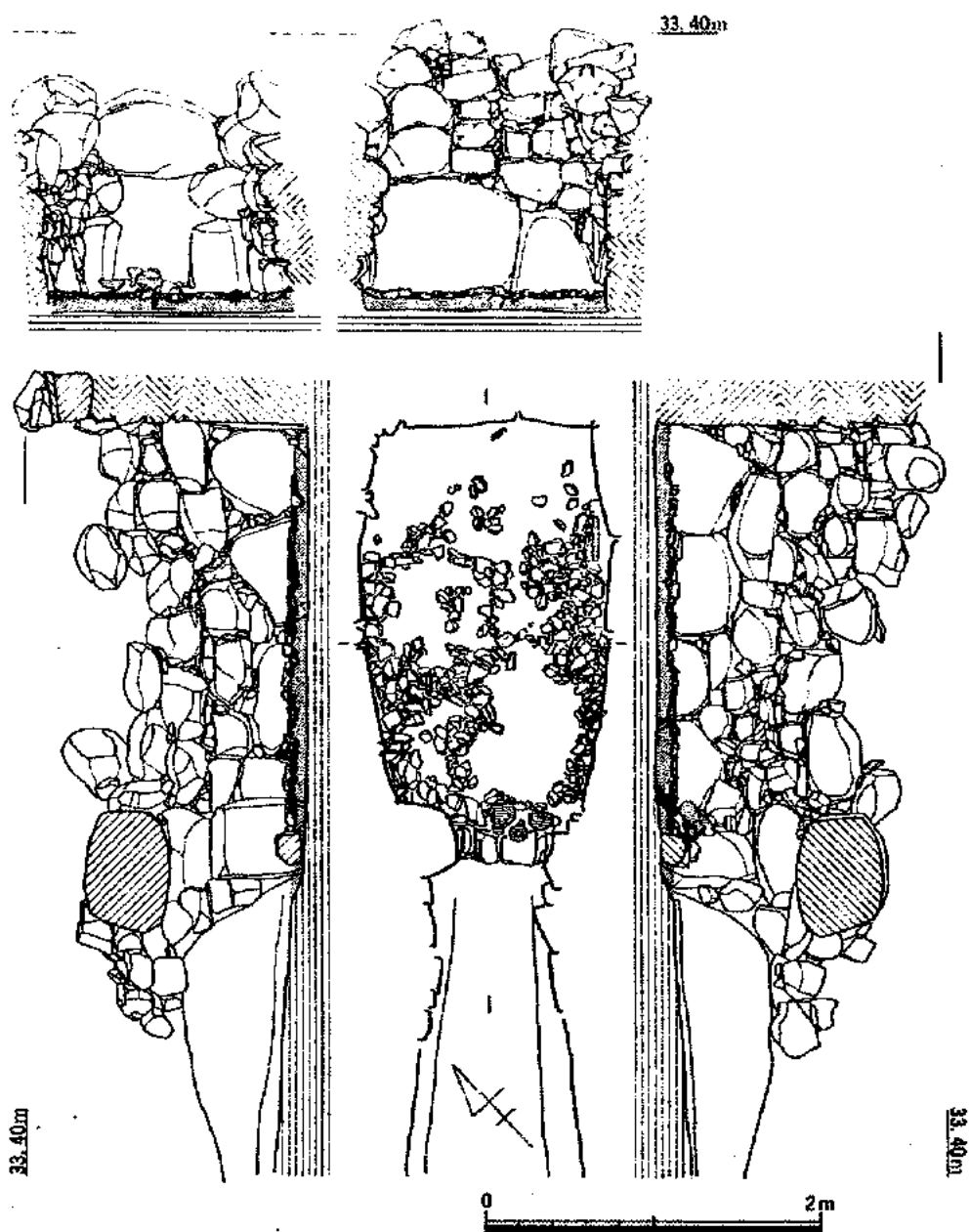
築造の年代は墓道から出土した須恵器杯身の形態からみて、6世紀の後半代に求められる。



第28図 朝町妙見遺跡第3号墳出土遺物Ⅷ (1/2)

#### (5) 第 4 号 墳 (第29~34図)

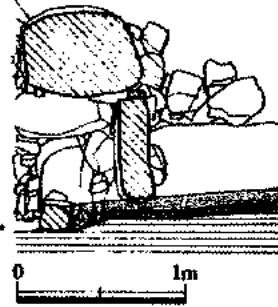
墳丘 調査区の南端に位置する。調査前の最高点は、標高33.4mで、東側に浅い盗掘坑があった。墳丘北側に傾斜変換点は観察できなかったが、第3号墳との間で完周する33.00mのコンターを基準にして、墳頂部を中心とする円を描くと、径8~9mの円墳に復原できた。地山は、旧表土と思われる灰黒色土層で、最高点は南側畔で標高33.6m、東側畔で32.8m、そして北側畔では33.3mあり、旧地表が北へ向って緩やかに、そして東へ向っては急傾斜をもって下降していた状況を復原できる。東および南側畔ではこの旧地表を削り取る地点(中心部からそれぞれ、4.2m、2.6m)から盛土が始まり、北側畔では、灰黒色土層に関係なく、4.8mの地点から始まる。この4.8mという数値は、墳丘南側で検出した溝底から石室中心点までの距離に等しい。したがって、第4号墳は、長径9.6m、短径約4.4mのいびつな墳形に復原で



第29図 朝町妙見遺跡第4号墳主体部実測図 (1/40)

きる。ただ、円形を意識したか、あるいは方形を志向して造営したかは不明である。

墳丘南の調査区際で検出した溝は、幅約 2.8m、深さ 0.8m の規模をもつが、墳丘を繞らずに、尾根と直交するのみである。また、先述したように墳丘北側に溝の掘込みはなく、これも第1号・第2号墳の南側で検出した溝と同様の性格をもつものであろう。ただ、この場合は第4号墳のみを切り離すのではなく、第3号墳ともに2基を切り離す性格を有していた可能性が強い。



第30図 朝町妙見遺跡  
第4号墳主体部閉塞図(1/40)

主体部(第29図) 盗掘坑は表土を掠める程度のものであり、石室天井石を露出させたところ、天井石は傾き、人頭大礫が多くみえていた。この時点で天井石が崩落しているとわかり、落ち込んだ石材を除去するとともに、墓道を発掘した。

墓道には、人頭大の礫が、数十個埋没していた。地山から浮いた状態にあり、かつ、石室側が高く、墓道前面へとレベルが下がって行く。墓道の貼石に崩壊した痕跡はなく、また、崩壊した石室の石材が流入したとも考え難く、現状では意味不明の石材というほかない。

玄門の閉塞は、高さ60cm、幅60cm、厚さ20cmの板石を立て、その左右両側と層石との間に準大礫を詰めてなされていた。

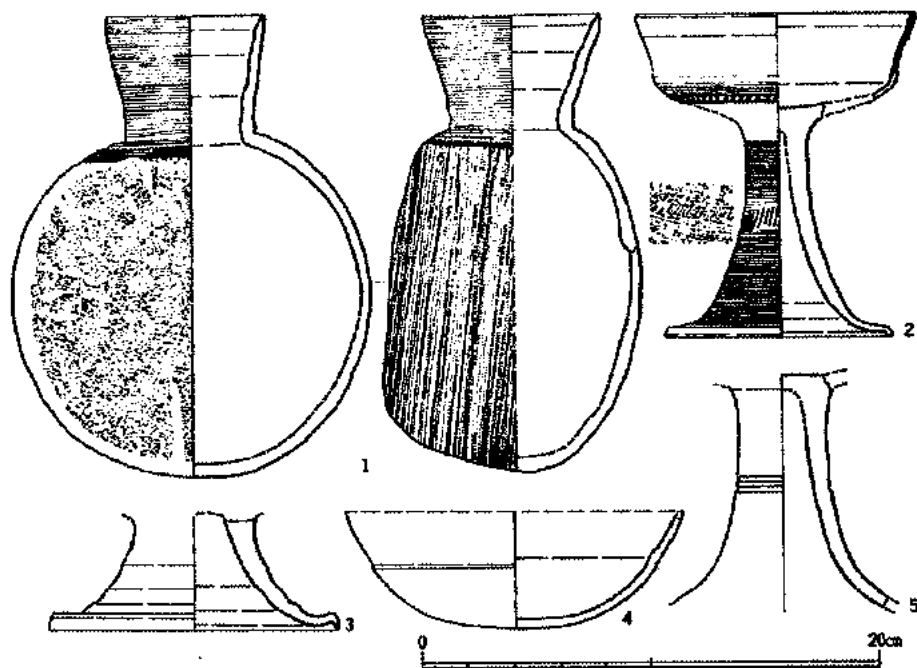
玄室は、長軸 2.4m、短軸 1.4m の長方形プランで、側壁は小さく膠らむ。們石は人頭大の角礫6個を並べて構成する。石室床面の敷石は、們石より一段下がった位置に準大の小礫を密に敷きつめるが、天井石の崩落と発掘時の擾乱によってかなり移動していた。壁体はほぼ垂直に近く立ち上がる。左側壁の石積の状態を見ると、奥壁から玄門にかけて、使用した4個の層石は徐々に小さくなり、2～4段目まで長軸40～50cmの石材を横位に並べ、その間隙に小礫をつめ込んでいる様子がよくわかる。奥壁も同様であるが、右側壁では層石の使用法は左側壁と同様であるが、それ以上の石積は乱れている。

墓道の貼石は、長さ1m前後と短く、プランは小さく開く。

被葬者は、頭位を玄門に向けて、玄室右側壁に沿って埋葬されていたようである。それは、大刀残片と鉄斧を右側壁直下の敷石上で、また、勾玉などの玉類を石室中央部付近で出土したこと、さらに玄室右奥の敷石に右側壁に平行して長軸をとる範囲でわずかなベンガラが付着していたことによる。また、玄室内から們石に立てかけるような状態で3点の土器を供献していた。しかし、正立状態の須恵器提瓶、土師器盃に内容物はなかった。

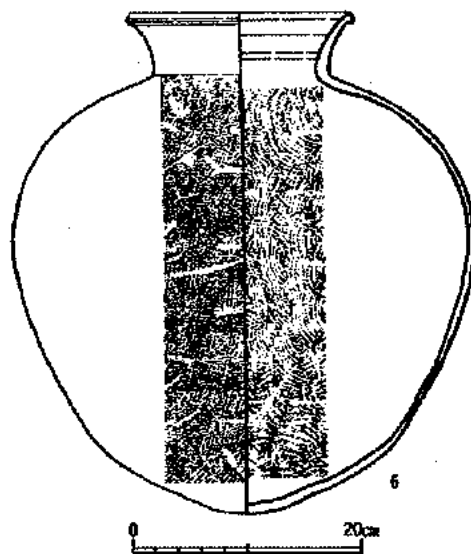
遺物(第31～34図) 遺物は玄室、墓道、墳丘、地山上から出土した。

玄門内の3点の土器の出土状況は以下のようである。石室のほぼ中軸線上に須恵器提瓶を正立した状態で、その右横に杯部を欠損した須恵器高杯脚部の完形品を倒立して置き、さらに右

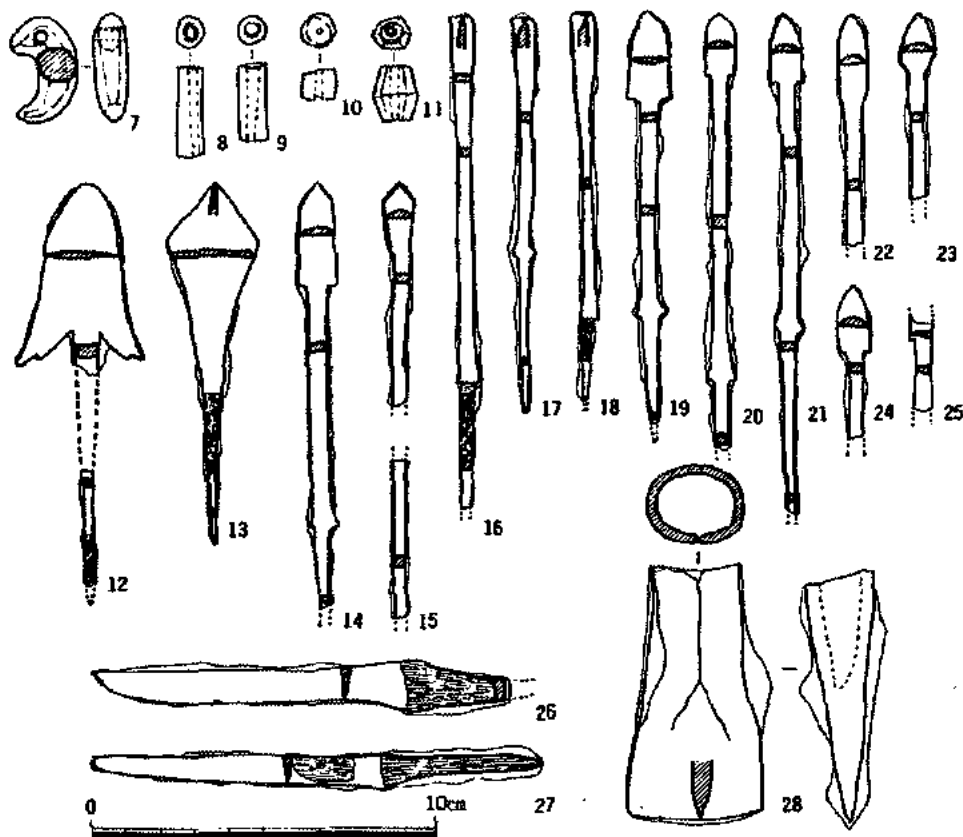


第31図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅰ (1/3)

側に土師器碗を正置していた。Ⅰはその提瓶。  
口縁部は外上方に小さく開き、端部を丸くお  
さめる。口縁部の一部が内側へ押し出されて  
いるが、それが注ぐ機能を意識したものか、  
焼成時に歪んだものかは不明である。2も玄  
室内に置かれていた高杯。杯部は墓道埋土中  
から2片出土した。接合しえないが、胎土、  
色調、焼成などからみて同一個体である。杯  
部は直角に近く立ち上がる口縁をもち、扇曲  
部外面に櫛状工具による列点文を付す。器壁  
は薄く、口縁部付近は2mmである。脚部はす  
らりと開き、脚端部に面取りを施す。カキ目  
が著しいが、中央付近に稚拙な櫛状列点文を  
施文する。3は墳丘から出土した須恵器脚部  
片で、高杯の一部と思われる。強い横振で調



第32図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図Ⅱ  
(1/6)

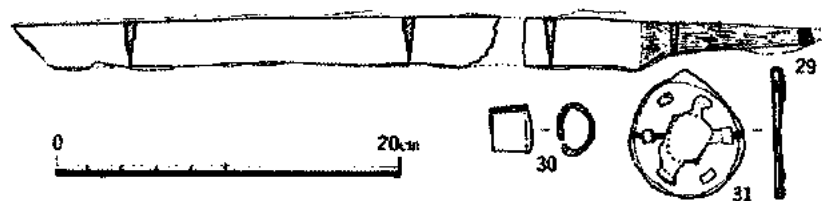


第33図 朝町妙見遺跡第4号墳出土遺物実測図面 (1/2)

整のため、器表の凹凸は著しい。4は玄室内で出土した土師器製の完形品。取り上げ後、細片化して口縁部を欠失した。器表の遺存状況は悪く、調整痕は不明瞭であるが、第3号墳出土の器と同様であろう。ただ、器形は3号墳のものに比して、口縁部の内彎度が弱く硬直化するとともに、口径が広がって胴部も扁平化し、後出的である。5は俗に言う「赤焼須恵器」である。焼成は軟質で淡赤褐色を呈し、器表の風化が著しいが、二条の沈線に示されるように、器形・調整手法は須恵器のそれと同じである。6は墳丘南の溝の肩で正立した状態で検出した大型甕で、口径約19cm、高さ約49cm。装飾は口縁部外面に一条の突帯を付すのみである。

次に、石室内外から出土した玉類、鉄製品を紹介する(第33・34図)

7~10は碧玉製品。7の勾玉は全長3.1cm、石理が斜めに走り部分的に斜磨している。色は灰緑色で上質とは言えない。穿孔は片面穿孔。8・9は濃緑色を示す上質の管玉。これも穿孔は片面からなされている。10は淡い緑青色の管玉片で、広義のいわゆる碧玉の範疇に入るが、

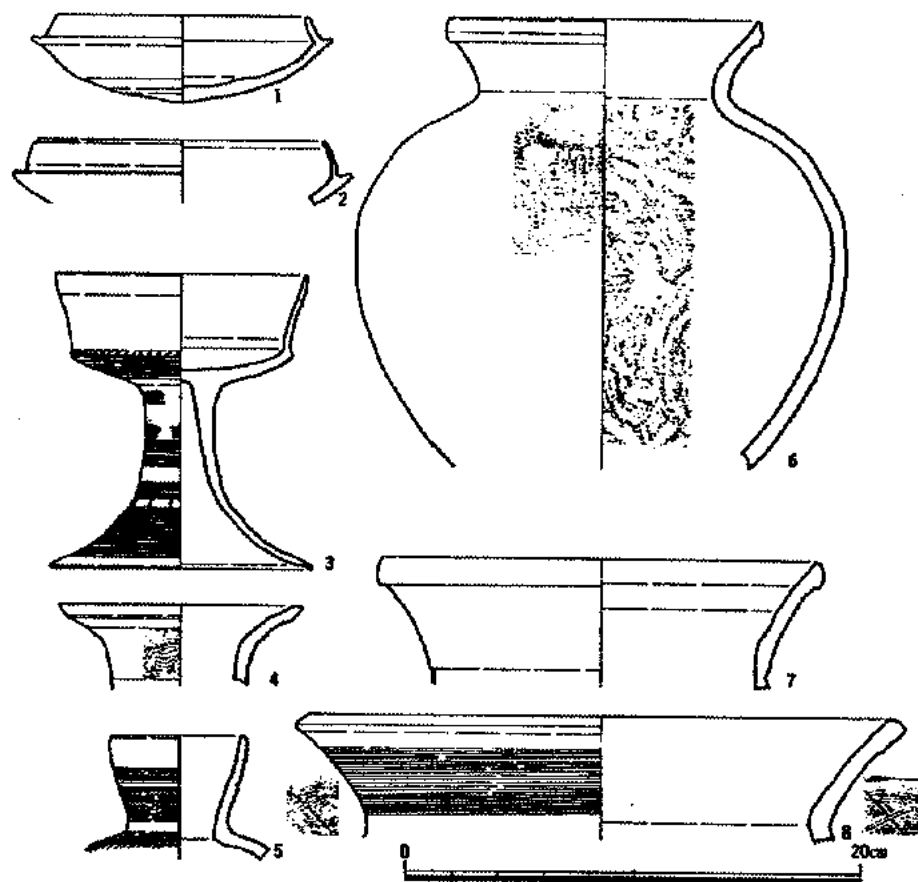


第34図 朝町跡見遺跡第4号墳出土遺物実測図IV (1/4)

緑色凝灰岩であろう。11は水晶製切子玉で、やや白濁している。

12～25は鉄鏃。いずれも長頸鏃だが、12・13は平根式、それ以外は細根式である。12は閉塞石前の墓道床面で検出したもの。完形ではないが、送葬儀礼に伴う呪術的な性格をもつと考えられる。13は筈波をもたない圭頭式鉄鏃。14は先端部の稜が甘い、五角形式、15は圭頭式とともに片丸造り。16～18は鑿頭式で4個体出土した。いずれも第3号墳出土例と異なって片刃である。19～24は鏃身の細部にバラエティがあるが、いずれも柳葉式に属する。25は片刃箭式の破片で、この形式は1点のみである。鏃身の総数は15個体であった。26・27は刀子。27の身は細く、先端は丸味をおびる。28は有袋鉄斧。全長約7.5cm、刃部幅約4cmの小型品である。29は大刀で、残存長は約45cm。棟の厚さは約0.5cmで、身の幅は3cm。関は片関で、目釘穴は不明である。30・31はこれに付属する刀装具。30は大きさからみて柄に装着するものであろう。長辺の一端を折曲げた、厚さ約2mmの鉄板をいびつな卵形に折り曲げたもので、内部に長軸に平行する木質が遺存している。31は鐙。外縁の厚さは約6mmで、内側へ向って薄くなる。外周には6個の長方形の透孔を穿つ。内縁はほとんど欠失するが、卵形を示すであろう。長径7.5cm、短径6.8cm。

次に、第3号・第4号両古墳の間に堆積する黒色土層中から出土した須恵器について略述する(第35図)。1・2は杯は杯身。1は口径10.8cm、器高3.8cmで、立上りなどは第3号墳墓道出土例(第26図1～3)に比して扁平である。2は復原口径が12.5cmでやや大きい。立上りの器壁は薄く、内嚢気味に内傾する。端部は強く横撫をするために小さく内折する。3は高杯。杯部口径11cm、脚部径11.4cm、器高13.1cmを測る。第4号墳から出土したもの(第31図2)と類似し、杯部屈曲部外面に櫛櫛列点文を付す。脚部外面のカキ目は部分的に波打ち、稚拙である。4は甕の口縁部であろう。口縁端部は水平面をなし、緩く凹む。5は提瓶。口縁部は内嚢気味に開き、端部を丸くおさめる。中央部付近に一条の沈線文を施す。6～8は甕。6は口径約13.5cm。口縁部は肥厚して面取りを行う。肩部に部分的に叩き目が残るほかは、外面全面を横撫でして叩き目を消す。内面に同心円文を残す。灰黄色ないし灰褐色を呈し、焼成は甘い。8は頸部外面の2か所に筈記号をもつ。



第35図 朝町妙見遺跡第3・4号墳出土遺物実測図(1/3)

この第3号・第4号両古墳の間に墓域を画する施設がないことは先述した。それとともに、石室の規模・平面プラン、被葬者を安置する位置や土器の供献状況、副葬した鉄製品の構成や点数などの多くの点で類似性をもつ。このことは、両古墳の被葬者あるいは造営者たちに密接な関係があったことを思わせる。

この古墳の築造年代は、玄室から出土した須恵器高杯から6世紀の後半代に求められよう。そして、第3号墳と比較するならば、共通する土師器壺は本古墳出土例がより後出的であり、また、鉄鍔の中の細根式鍔の占有率からみても同様である。したがって、本古墳は6世紀後半頃に第3号墳にやや遅れて築造されたといえる。



## (6) お わ り に

以上が朝岡妙見遺跡の発掘調査で得た知見である。調査方法について自己批判する点が多くあったが、得た内容はそれにもまして地域史に新しい頁を加えるものであった。

本遺跡は4基の古墳からなり、調査区南には、さらに4基ほどの古墳が営まれている。調査区内の第1号・第2号古墳はほぼ4世紀後半前後の築造になるが、第3号・第4号墳は前2者に遅れること約200年経て営造されたもので、おそらく未調査分の4基の古墳とともに後期群集墳を構成しているのであろう。この2群の被葬者達にどういう関係があったのか、あるいはまったく無関係に、隣接して造墓を行ったのみなのか知るすべもない。しかし、第1号・第2号、第3号・第4号墳のおのおのには密接な関係を想定できる。時期的地理的に近接しており主体部にも共通性があるからである。以下に、遺構・遺物についてまとめる。

**墳丘** 第1号墳は径16m前後の扁円形、第2号墳は長軸16m、短軸5m以上の長方形墳と考えられるもので、いずれも頂部に平坦面を削り出して主体部をおく。盛土はほぼ頂部平坦面にのみ、30~40cmの厚さでなされるが、埋葬主体部を覆うだけにすぎないようである。第1号・第2号墳はともに主尾根側に溝を削って、区画している。

第3号・第4号墳は径10mに満たない小円墳であろう。これも尾根の形状に墳形を規制されている。両者の間に互いを区画する遺構はなく、4号墳の南に尾根線に直交する溝を掘削するのみである。これは、第4号墳と調査区外に続く古墳を区画するもので、第3号・第4号墳の密接な関係がうかがえる。

**主体部** 第1号墳第1主体部の粘土槨は、宗像市郡内で初めての例である。北部九州の検出例は決して多くはなく、福岡市西区（現早良区）藤崎遺跡第4号墳<sup>④</sup>、筑紫郡那珂川町江子若山遺跡円墳<sup>⑤</sup>、同井河古墳群中の6基<sup>⑥</sup>、筑紫郡太宰府町（現太宰府市）宮ノ本遺跡第3号墳<sup>⑦</sup>、甘木市大願寺古墳<sup>⑧</sup>、久留米市七曲山第3号墳<sup>⑨</sup>などが管見にのぼるのみである。このうち、恵子若山遺跡円墳が珠文鏡を出土し、大願寺古墳で三角縁神獣鏡を出土したと伝えられるものの、そのほかの古墳の遺物は貧弱である。墳丘規模はいずれもほぼ20m以下で、墳形には円形・方形がある。これらの築造年代は大略4世紀後半から5世紀前半に求められる。以上の数少ない例ではあるが、北部九州では、粘土槨を採用する古墳は中・小規模の古墳に限っていた可能性がある。これは畿内地方で大規模な古墳に粘土槨が採用されず、副室・陪塚あるいは大王の近くに位置する有力地方豪族層の古墳などの主体部として多用されている現象に通じる点がある。また年代もほぼ同時期である。

第1号墳第2主体部、および第2号墳の主体部は、箱式石棺であった。箱式石棺を主体部とする古墳は、市内では久戸古墳群中に3基<sup>⑩</sup>、網元古墳群第6号墳<sup>⑪</sup>、名残遺跡群徳重仏祖第2号墳<sup>⑫</sup>などがあり、周辺地域では、玄海町上高宮石棺墓<sup>⑬</sup>、津屋崎町奴山5号墳<sup>⑭</sup>などが知られている。

久戸古墳群第6号墳では三角板葺短甲を出土し、4世紀末～5世紀前半に位置付けられ、他の古墳も相前後する時期とされる。稲元古墳群第6号墳は無遺物だが、4基の主体部が同一墳丘上に位置することから、やはり古墳時代前期と推定されている。上高宮石棺墓は小型仿製鏡や銅鐙、奴山5号墳は陶質土器の出土で著名となった。概してこれらはいずれも4世紀～5世紀前半の古墳である。そして朝町妙見遺跡第1号・第2号墳もその範囲におさまるもので、当地域で箱式石棺を埋葬主体として利用した時期をある程度限定できると考えられる。

第3号・第4号墳はともに単室の横穴式石室を主体とする。羨道部はなく、短い貼石を付すのみである。石室はいずれも天井石が崩落していた。閉塞石は完存しており、第3号墳では人頭大の礫と板石を用い、第4号墳は大きな板石を立てかけていた。玄室は長方形プランで、側壁がやや膨らむ。壁体は垂直に近く立ち上がる。両古墳のプランは、長軸長で、第3号墳が約20cm上回るものの、ほぼ重なる。袖石の積み方は異なる。第4号墳の遺物の出土状態などから埋葬時の玄室内を復原すると以下ようになる。遺体は右奥に側壁に平行して頭位を玄門側にとって安置し、棺の周囲に鉄器を副葬する。そして、玄門の内側に3個体の土器を並べるのである。第3号墳も同様な状況を推定できる。ここでは崩落した石材に押し潰された人骨片を玄室右奥で発見した。

遺物 第1号墳の3点の壺形土器は築造時期の決定にもっとも有効なものである。ことに広口壺は日常土器の供献という意味で、集落遺跡との直接対比が可能である。この壺は、口縁端部のつまみ出しと口縁部が描く微妙な曲線、頸部の横撫でなど、布留式土器の要素を濃く表している。類似する京都府元稲荷古墳出土の例<sup>13</sup>と形態の比較であれば、胴部の張りなどの点でより古い様相を示す。ただ、文化伝播の過程を考慮するならば、いちがいに先行するとは言いきれない面がある。肩部の波状沈線は、山陰地方に源流を持つと思われるが、肩部の横刷毛とともに、北部九州の土師器編年の中で一つの指標となっている。柳田康雄氏の論考に照らすならば、氏のⅡの期、4世紀中葉に相当する。大型の二重口縁壺については、形態が特異なもので比較資料を知らない。今後の資料の増加を待ちたい。

第2号墳の遺物では、大型の直刃鎌が極立つ。直刃鎌は、5世紀前半に半島からの新技術の摂取に伴って曲刃鎌に活躍の場を奪われるという<sup>14</sup>。北部九州で直刃鎌を出土した古墳は、筑紫郡那珂川町妙法寺古墳群第2号墳前方部箱式石棺<sup>15</sup>、大牟田市清塚古墳<sup>16</sup>などがあり、いずれも前期に比定されるものである。類例は多くなく、貴重な資料を提供した。

第3号・第4号墳の出土遺物は乏しかった。しかし、玄室中の遺物の出土状況は、当時の葬送を復原するのに役立つ好資料である。

第3号墳では、大刀1振、鉄鐙7点、刀子1点、曲刃鎌1点、それに玉類が、第4号墳では大刀1振、鉄鐙15点、刀子2点、鉄斧1点、それに玉類を出土した。ともに、1点の馬具の残片も検出しえなかったが、元来、副葬されていなかったとみるべきであろう。共通する点は、

大刀1振、刀子・鋸と農具を有するが、馬具を持たないという点である。より緻密な検証が必要であるが、後期群集墳を造営しえた階層の鉄製品の所有形態を、この2古墳は示しているのであろう。古墳時代後期の葬制には、前方後円墳、大型円(方)墳、土壇墓など種々あるが、石室を築き、墳丘を占有できる階層の追求に貢献しうる好資料といえる。

本遺跡は宗像市部の歴史を大きく変えたといっても過言ではない。従来、この地域の前期古墳としては、全長61mの前方後円墳、東郷高塚古墳<sup>9</sup>、先の久戸古墳群中の箱式石棺をもつ3基、稲元古墳群第6号墳などが挙げられていたが、推測の域を出ないもの、遺物の残存状況の悪いものであった。朝町妙見遺跡の調査によって、4世紀に遡る古墳の存在があきらかになったことは、今後の調査の進め方にも慎重さを要求している。

注① 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布図 宗像郡編』1977

注② 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号・第4号 1978・79

注③ 横山浩一「須恵器に見える車輪文印き目の起源」『九州文化史研究所紀要』第26号 1981

注④ 福岡市教育委員会「福岡市西区藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第80集 1982

注⑤ 高倉洋彰ほか『恵子若山遺跡』 1975

注⑥ 那珂川町教育委員会「井河古墳群—筑紫郡那珂川町大字片縄所在古墳群の調査報告書」『那珂川町文化財調査報告書』第10集 1983

注⑦ 太宰府町教育委員会『宮ノ本遺跡—太宰府町の文化財』 1980

注⑧ 柳田康雄「原始編」『甘木市史』 1981

注⑨ 石山勲ほか「七曲山古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXVIII—福岡県久留米市所在祇園山・七曲山両古墳群の調査』 1979

注⑩ 宗像町教育委員会「久戸古墳群—宗像郡宗像町大字河東所在古墳群の調査」『宗像町文化財調査報告書』第2集 1979

注⑪ 稲元古墳群調査団『福岡県宗像郡宗像町稲元古墳群第Ⅰ期調査報告 1975春』 1976

注⑫ 現在調査中、遺物はない。

注⑬ 宗像大社復興期成会『宗像沖ノ島』 1979

注⑭ 津屋崎町教育委員会『奴山5号古墳』 1978

注⑮ 置田雅昭「初期の朝顔型埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号 1977

注⑯ 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 下巻』 1982

注⑰ 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 1967

注⑱ 那珂川町教育委員会「妙法寺古墳群—福岡市筑紫郡那珂川町大字恵子字妙法寺所在古墳の調査」『那珂川町文化財調査報告書』第7集 1981

注⑲ 大牟田市教育委員会『澄栄古墳—大牟田市黄金町1丁目所在の古式古墳の調査』 1975

注⑳ 日本住宅公団『東郷遺跡群』 1967

## 5. 武丸大上げ遺跡

### (1) 概 要

遺跡は宗像市の東北部、城山（標高 369.3m）から東へ派生する丘陵の西側緩斜面に位置する。遺跡の北東部は標高約60mの城山峠を越えて遠賀郡遠賀町に至る。遺跡の南側前面は吉武盆地が広がり、盆地の中央を東西に走る幹線道路は猿田峠を越えて鞍手郡鞍手町へ抜ける。

吉武地区は宗像郡玄海町神湊を河口とする釣川の上流にあたり、宗像市では、南郷地区と並んで2大穀倉地帯である。これまで文化財調査が行われておらず、今回の調査は緊急発掘調査ながら最初の発掘である。

遺跡地は現在水田であり、丘陵西側緩斜面の標高約32mの高さに遺構の分布が認められる。既に前年度の試掘調査により、多量の瓦を確認しており、寺院の存在も推測させた。本年度の圃場整備事業に先立ち、削平部分の表土および包含層を除去にかかった。瓦はこの包含層中に多く認められ、遺構内からの検出はなかった。

検出できた遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・石組み遺構である。

### (2) 遺 構（第36図）

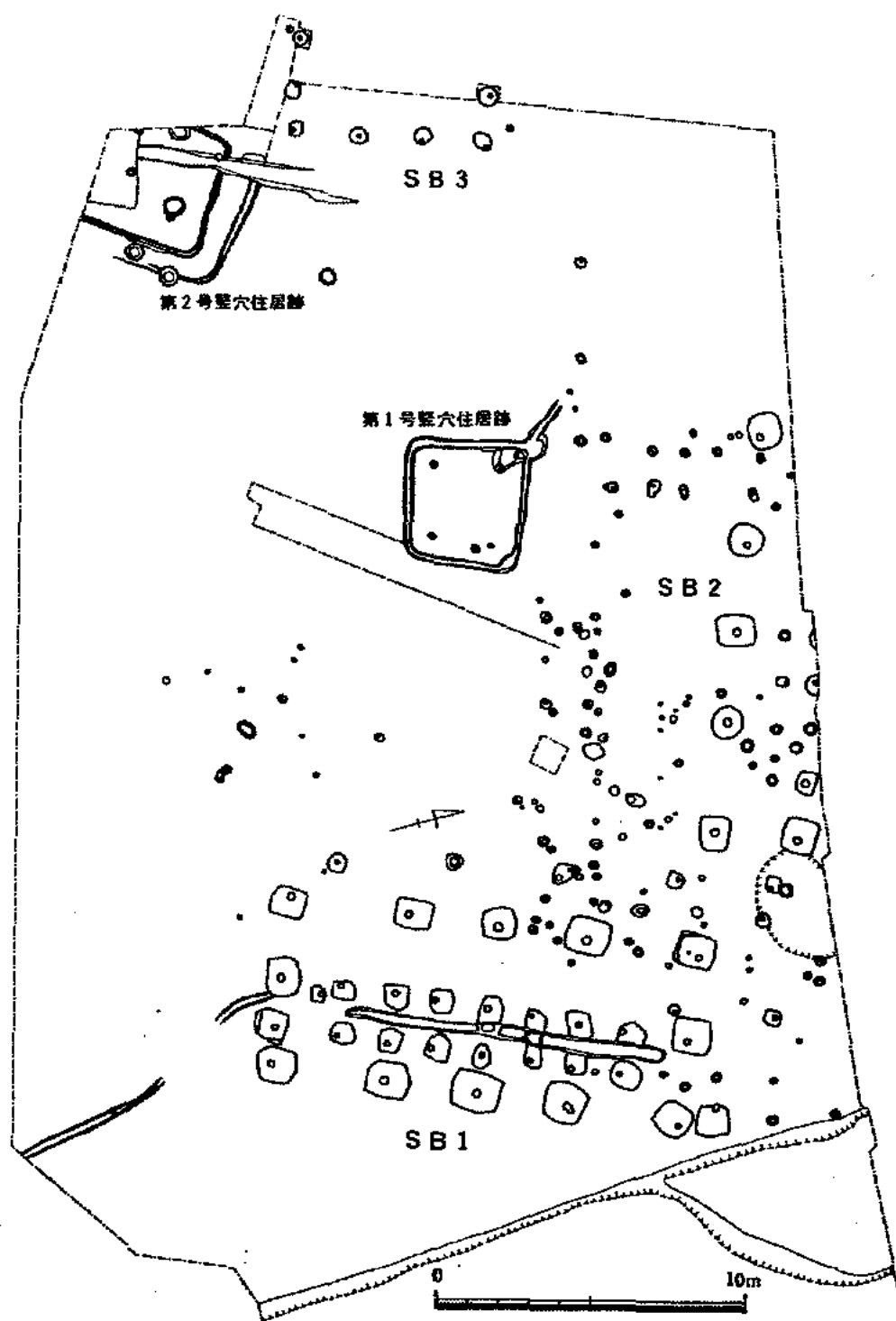
水田6枚に、まず、トレンチを開けて遺跡の広がりを確認する作業に入った。最も遺構の広がりを見せたのは、最北の水田であった。北から2枚目の水田は削平がかなり進んでいたが、西側に柱穴を1基確認した。全体として遺構の広がり、第36図の調査区の北および西へ広がりを見せるものと思われる。北側では、隣りの水田に主要な建物跡が推定できる。また、西側では隣りの水田との間に比高差があるが、これは整地に伴うもので、自然傾斜面が緩く西側へ延びており、さらに西側へ遺構の分布が広がるものと思われる。

次に検出した遺構について概略を述べたい。

**第1号竪穴住居跡** 方形竪穴住居跡である。規模約4.2m×4.0m、周壁際に小溝が掘られている。この溝は北西隅で住居外へ延びている。主柱穴は4本である。出土遺物は大半が床面ないし、溝中の出土である。

**第2号竪穴住居跡** 調査区の西南隅で検出したもので、1辺約5.8m×6.0m以上の長方形プランの住居跡である。床面中央に炉跡と思われる焼土面があった。北と東の壁際には幅約0.5m～0.9mのベッド状遺構が認められた。遺物は床面直上から出土しており、遺物の様相と住居跡の形態から古墳時代前期に位置するものと思われる。

**SBI** 調査区東側で長軸を南北からやや東に振った方位で、2×4間の大型建物跡を検



第36図 武丸大上付遺跡遺構配置図 (1/200)

出した。主柱穴は隅丸方形で1辺100cmを越えている。深さは80～90cmと深い。土層観察から柱の径は25cmを越えない。柱心の距離は桁行で東側1340cm・西側1339cm、梁行は北側で555cm、南側で557cmである。この中、桁行の両側1間は柱心間が長い。柱心間の距離を次の方法で割り出すと（柱心間合計÷間数：cm）、梁行で278cm、桁行で296.5cmと373cmとなる。また、この建物跡の内部には2列の柱穴が、長軸中央線から東側半分によって検出できた。全体の構造としては、単独ではなく、第1号掘立柱建物の付属施設であると考えられる。平城宮の調査ではS X 541の建物をS B 540の付属施設として、これを倉庫に推定している。付属施設の柱穴は、規模が小さく、柱の径も20cmを越えないものである。

**S B 2** S B 1の北側梁行が南側桁行と一直線となるように、長軸を東西方向にとっている。調査区内で、建物の半分ほど検出した。構造はS B 1と同一規格で建てられており、内部施設もS B 1と同一規格であることから、2棟の建物は同時期に建てられたものと考えられる。第36図からするとS B 1の西側とS B 2の南側平坦面は建物の建たない空間となっている。

**S B 3** 調査区の西側で、長軸を南北にとる掘立柱建物である。S B 1・2に比べると小さく、梁行2間以上、桁行3間で、梁行柱心間約150cm、桁行柱心間約210cmを測る。

### (3) 遺物（第37・38図）

出土遺物は堅穴住居跡、柱穴内と包含層中からのものである。

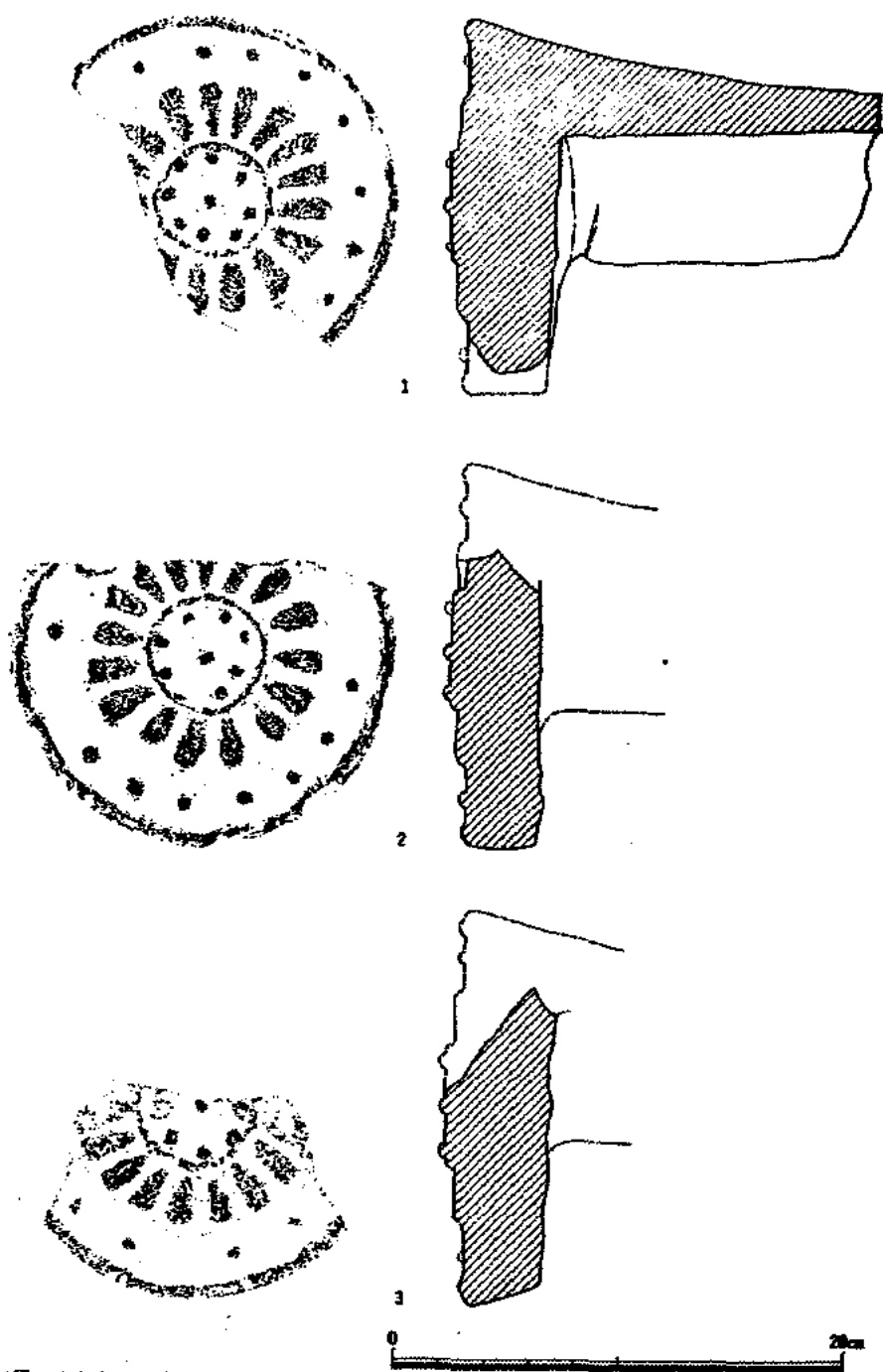
**第1・2号堅穴住居跡** 土師器の壺・甕・高杯・碗、須恵器の杯を出土している。遺物の年代は4世紀～6世紀代におよんでいる。

**包含層（第37・38図）** 包含層中より多数の瓦を出土している。各土層中より出土した瓦には差がなく、遺物の出土状態からすると、建物の廃絶後、後世の整地作業に伴って遺物が分散して堆積したものと思われる。

**軒丸瓦（第37図）** 1～3とも同范によるものと思われる。出土軒丸瓦はこの一種類で、単弁十六弁蓮華文の瓦である。低く突き出した中房と細弁からなる。中房は1+8の蓮子を配する。蓮弁は先端が丸味を帯びた菊花状の細弁で、内区と外区との圏線はない。外区には16個の珠文を配している。外縁は低い斜縁となっている。瓦当径は約17.2cmである。

**軒平瓦（第38図）** 均正唐草文を配する瓦で、4～7とも同范によるものと思われる。中央の1本の縦線を中心として左右の軸線を中心にして、上下に4回反転する唐草を、さらに、中央上下にも、1回転の唐草を配する。上下に内・外区を画する界線はない。上下の外区には珠文を配し、両脇には左右各1個の珠文を配する。両脇の縁は幅の狭い凸帯をつくる。頸は弱い段頸で貼り付けによっている。凸面には縄目の叩き目が残る。瓦当面の長さ約29cm。

他の瓦には、道具瓦の鬼瓦、製斗瓦等が見られる。鬼瓦は内盛りの豊かな鬼面文を主体としている。右側の目と頬が残っている。内区と外区を画する界線を持ち、外区には珠文を配して



第37図 武丸大上戸遺跡出土遺物実測図 1 (1/3)

いる。

#### (4) ま と め

掘立柱建物は調査の結果から、さらに北と西側へひろがっているものと思われる。この中、北側へは大型の掘立柱建物が続く可能性があり、今回検出した建物を倉庫とした場合には、最も主体となる建物が推定できる。また、西側へは、今回調査の小形の掘立柱建物に続く建物群がのびるものと思われる。遺跡としては、東側の標高の高い位置に主要建物が配置されることになる。SB1・2とも各地に検出されている建物に負けぬ大型のものであるが、遺跡の立地や建物群の構造についての検討は、今後の資料の増加を待ちたい。

掘立柱建物に伴うと考えられる瓦は1種類で、軒瓦はセットになる。

この種の瓦は類例に乏しいが、浜口廃寺出土資料に類例を見い出せる。報文中の軒丸瓦は中房・弁の形状はよく似るが、弁のつくりが当遺跡に比べて細味である。軒平瓦については、報文中の唐草はやや肉太に思える。胎土については、浜口廃寺のものは、砂粒も少なく良好といえる。ただ報文中の瓦が破片であるため、正確に比較できないが、同范とは言い難いが、いくつかの類似点をもっている。

瓦だけの出土であり、年代観については、現時点では掘立柱建物の成立時期を8世紀後半～9世紀前半の間に納めておきたい。

宗像市部では畦町遺跡、神興廃寺から瓦を出土しているが、当遺跡の瓦とは直接には結びつかない。

近年の発掘調査では、全国的に官衙跡の発掘資料が増えつつあるが、従来考えられていた遺跡立地とは違うところに大型の掘立柱建物が認められる傾向があるため、これらの建物を、郡衙より小単位の郷を単位とした建物群の構造について今後、検討を加える時期にあると思われるが、この種の建物群の位置づけに、当遺跡の建物群は格好の資料といえる。

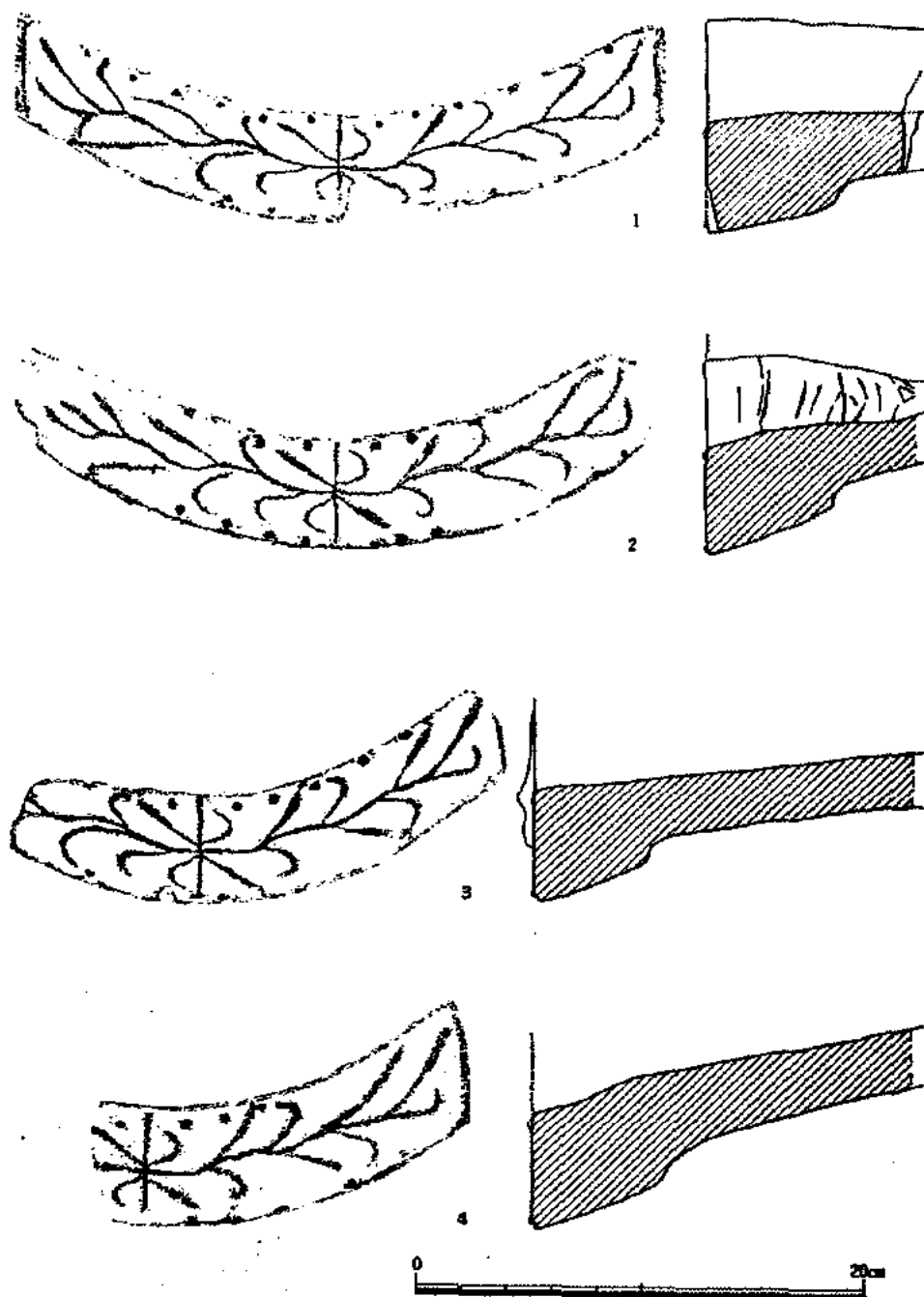
最後に当遺跡の発掘調査および整理にあたり次の方々に御指導、助言を戴きました。厚く御礼申し上げます。(敬称略) 北九州市立考古博物館 小田富士雄、九州歴史資料館調査課長 石松好雄、主任技師 横田賢次郎、森田勉、高橋章。

注① 『平城宮発掘調査報告 VII』 奈良国立文化財研究所学報 第26冊 奈良国立文化財研究所 1976

注② 石松好雄・高橋章『浜口(月軒)廃寺』芦屋町教育委員会 1979

注③ 九州歴史資料館編『九州古瓦図録』 1981





第38図 武丸大上げ遺跡出土遺物実測図Ⅱ (1/3)

## 第IV章 おわりに

1983年度の緊急発掘調査は5件、約5000㎡について実施した。この中の用山堂ノ上遺跡と朝町妙見遺跡は本書をもって本報告としている。

野坂中山遺跡、曲香烟遺跡、武丸大上げ遺跡については整理日程や出土遺物の量から本年度の本報告を断念し、概報の形をとることになったのは担当者の力不足と反省をし、今後、早い時期に整理報告の責務を果たしたい。

以下に各遺跡の調査成果と課題を略述する。

野坂中山遺跡は、13～14世紀を主体とする集落跡である。建物の規模、構造については現段階では明確にし難く、今後に課題を残している。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、石製品等が出土しており、大半は包含層の出土である。この中、青磁双耳小甕は、日本での出土例がない。この種の遺物は、中国南方や東南アジアにおいて出土例が紹介されている。『宗像神社史』によると、中世の宗像大宮司家は中国、朝鮮との貿易を盛んに押し進めており、このことと当遺跡をはじめとして朝町山添遺跡、石丸遺跡出土の輸入陶磁器は密接な関係にあると言える。

曲香烟遺跡は、弥生時代前期末を前後する生活遺跡である。標高約30mの2ヶ所に袋状竪穴群を検出した。住居跡を伴わない点は光岡長尾遺跡と類似し、住居地は竪穴群より低位に考えられる。

遺物は土器と石器が各竪穴から出土している。大半の遺物が未整理のため、知見できる範囲で土器の傾向について略述したい。

壺に見られる諸特徴は関門地域的様相を強く持っている。壺、甕に見られる体部上半の屈曲や底部の上げ底は縄文式土器の要素を残している。これらの特徴は、今川遺跡、光岡長尾遺跡にも共通するところである。

用山堂ノ上遺跡は、調査面積が狭く、遺構が少なく、遺物の出土がないことから、遺跡の性格や年代については不明確であるが、周辺採集の遺物に龍泉窯系青磁が見られることから、中世の一時期におさえることは可能である。

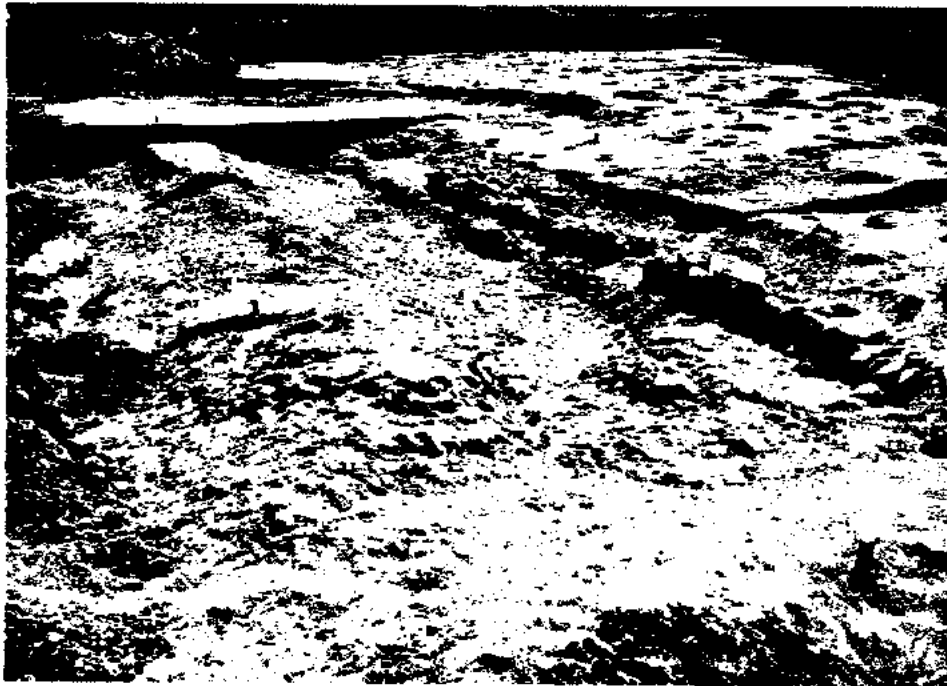
朝町妙見遺跡は、4～6世紀に連続して営まれた4基の古墳群からなる。第1・2号墳は主体部に粘土槨、箱式石棺を持ち、第3・4号墳は横穴式石室を主体部になっている。第1号墳の粘土槨は類例の少ないものであり好資料である。第1・2号墳の出土遺物は4～5世紀の古墳について貴重な資料を提出している。

武丸大上げ遺跡は、獨立住建物と出土遺物が注目される。建物は大型のもので、2棟確認したが、今後、周辺の調査によって、より主体となる遺構の検出が推測できる。瓦は他地域に類例が乏しいが、浜口廃寺資料にやや類似が見い出せる。今後、窯跡の確認が必要となろう。

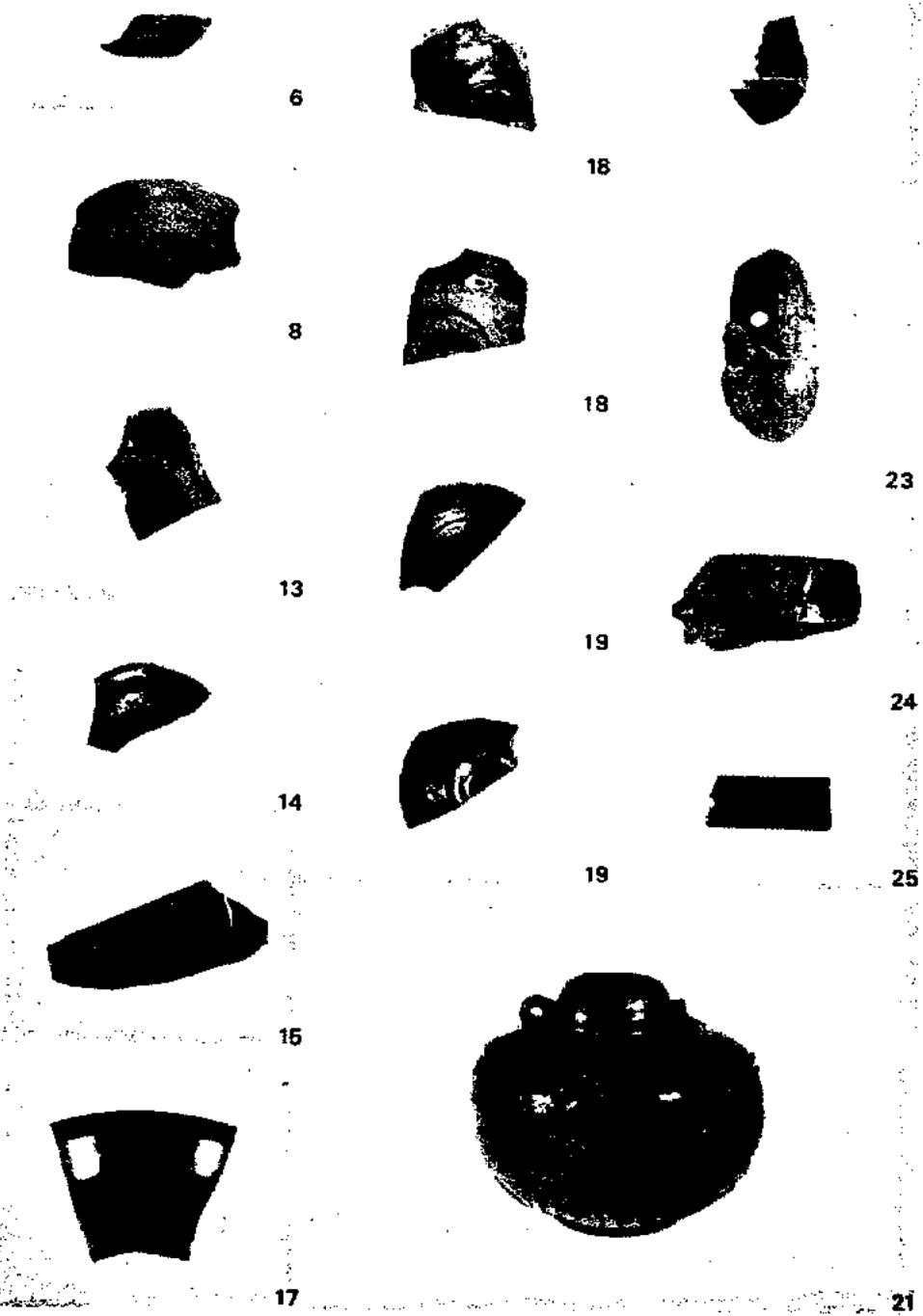
# 版 圖



1. 空中写真（北から）



2. 第1号溝（北から）





1. A地区竖穴群



2. B地区竖穴群



3



7



5



6



11



12



13



14





1. 調査区全景



2. 小竪穴

3. 第1号竪穴





1. 調査前全景（北から）



2. 調査後全景（北から）



1. 第1号墳第1・第2主体部



2. 第1号墳第1・第2主体部調査後

图版 8

朝町妙見遺跡第1号墳出土遺物



1



3



6



8



9



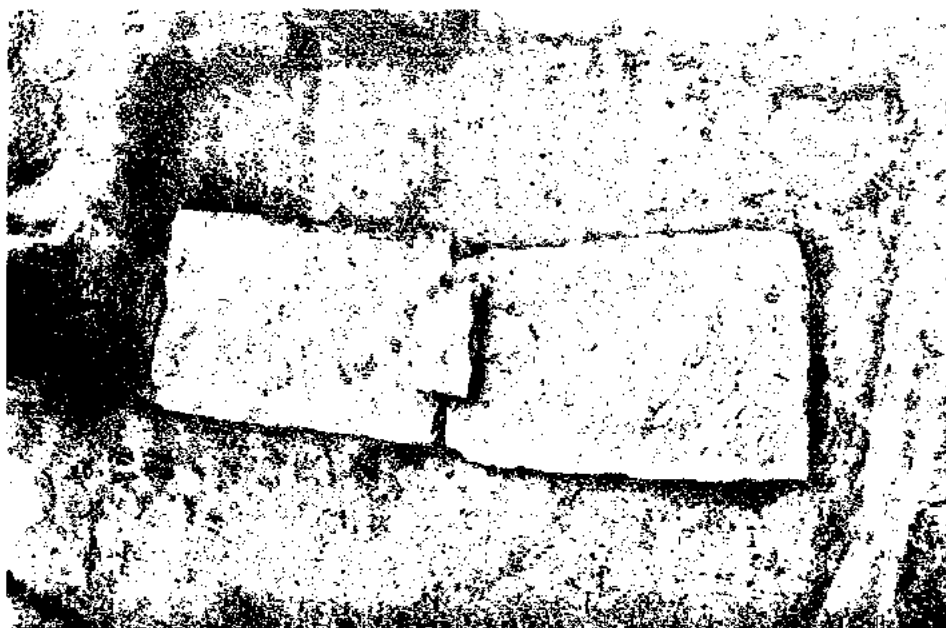
4



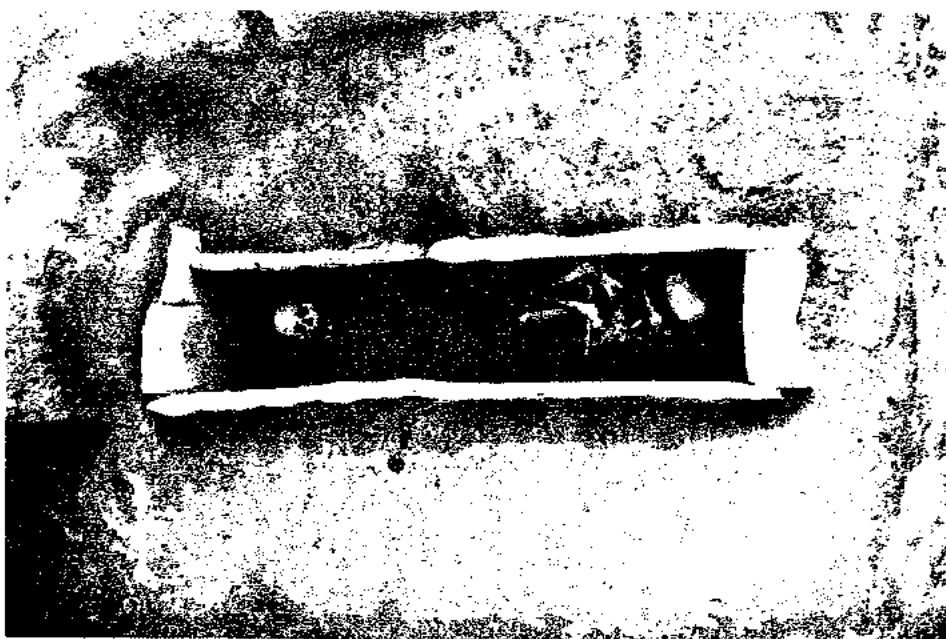
5



11



1. 第2号墳主体部



2. 第2号墳主体部（天井石除去後）



1



2



3



1. 第3号墳主体部



2. 第3号墳主体部閉塞状況



1



2



3



5



6



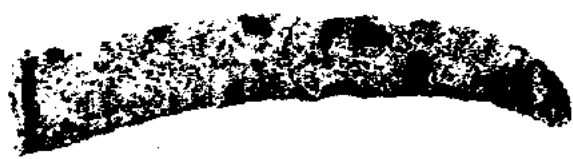
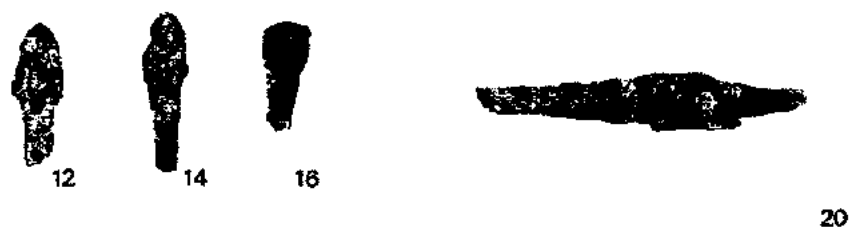
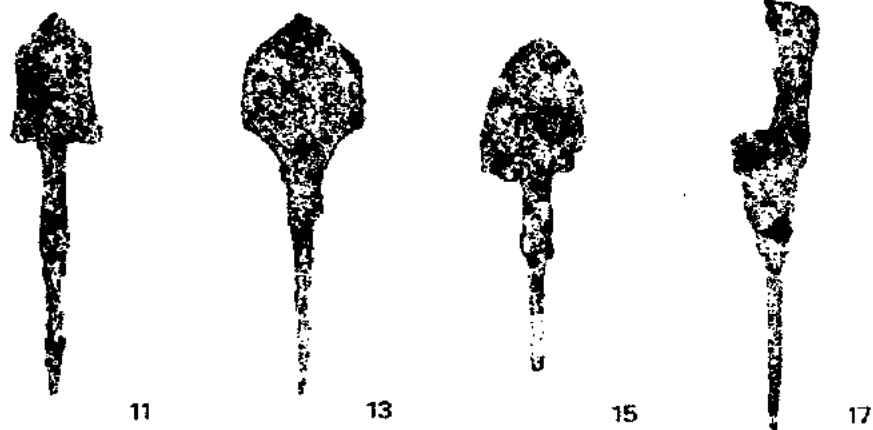
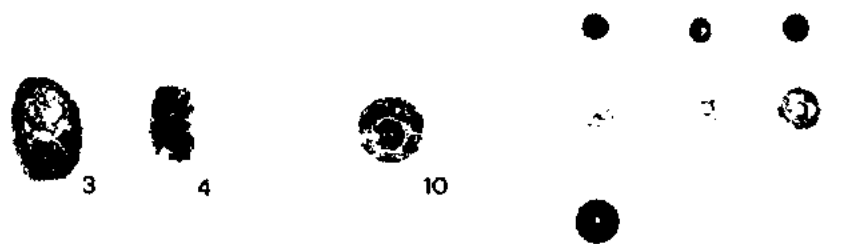
7



8



12







1. 第4号墳主体部



2. 第4号墳玄室遺物出土状況



1



2



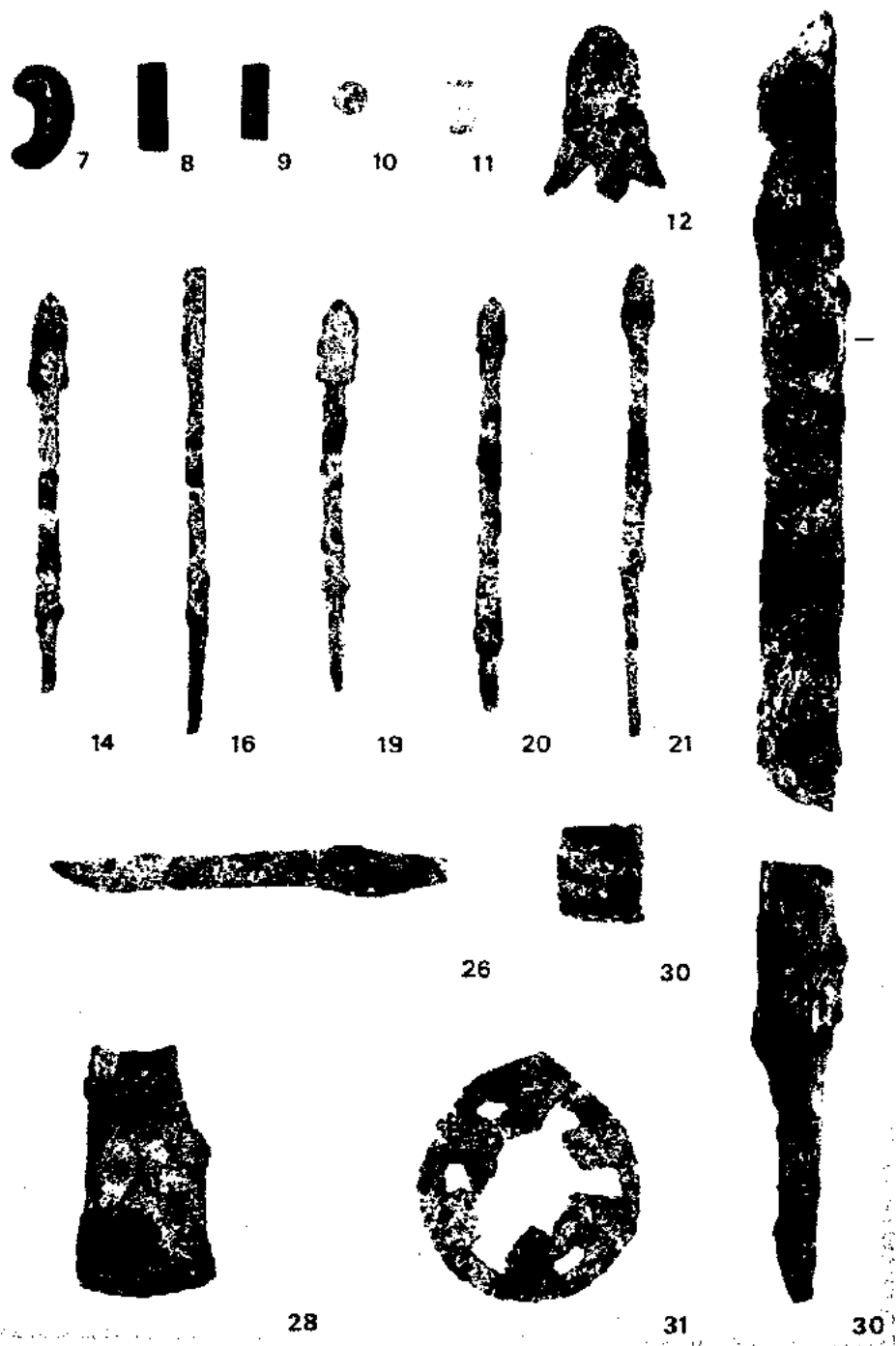
3



4

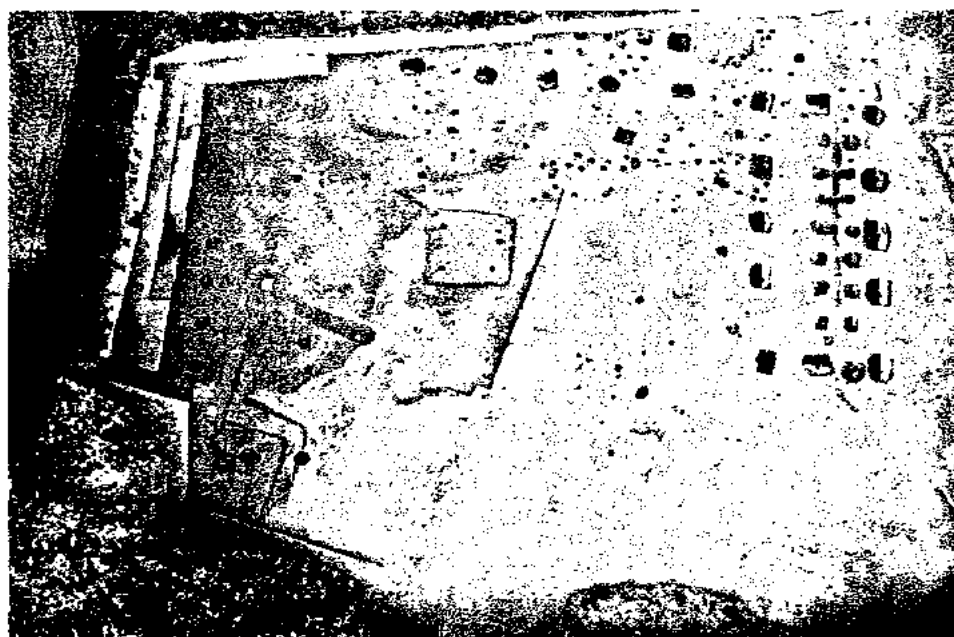


5





1. 遺跡全景 (南から)



2. 調査区全景



1



2



4



5

宗 像

埋蔵文化財発掘調査概報

— 1983年度 —

宗像市文化財調査報告書 第 7 集

1984年 3 月 31 日

発 行 宗 像 市 教 育 委 員 会

福岡県宗像市大字東郷995番地

印 刷 釜 瀬 印 刷

福岡県宗像市福元